

Fr.シラーの『ヴァレンシュタイン』三部作について —— 歴史劇の試み ——

松 山 雄 三

- (1) はじめに
- (2) 成立史
- (3) 『ヴァレンシュタインの陣営』について
- (4) 『ピッコローミニ父子』について
- (5) 『ヴァレンシュタインの死』について
- (6) マックスとテークラ
- (7) むすびに

(1) はじめに

Fr.シラー (Schiller, Friedrich 1759 – 1805) の『ヴァレンシュタイン』*Wallenstein*三部作 —— 『ヴァレンシュタインの陣営』*Wallensteins Lager* (1798年)、『ピッコローミニ父子』*Die Piccolomini* (1799年)、『ヴァレンシュタインの死』*Wallensteins Tod* (1799年) —— は、十七世紀にヨーロッパ社会を混乱と不幸のどん底に陥らせた三十年戦争 (1618 – 48) を背景にしている。しかし、人類の精神的進歩を信じるシラーにとって、一条の光は、三十年戦争によって廃墟と化したヨーロッパが、ウエストファリア条約 (1648年) のおかげで秩序回復を迎えたという歴史的な事実であった。「ウエストファリア条約の名の下でよく知られた不可侵の聖なる平和を締結したことは、なんとという偉大な仕事であったことだろう。如何に際限なく思われた障壁が打ち倒され、相互に競い合う関心が一つに纏められなければならないことか。……」(NA 18,384) と、シラーは『三十年戦争

史』 *Geschichte des Dreißigjährigen Krieges* (1790年) の結語で讃える。つまり、人間の欲望によって引き起こされた社会の混乱と崩壊に、人間の自浄努力によって復興への道筋が付けられたのだった。既にカール学院の第三の卒業論文『人間の動物的本性と精神的本性との連関についての試論』 *Versuch über den Zusammenhang der thierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen* (1780年) やイエナ大学教授就任講演『世界史とは何か、また何のためにこれを学ぶか』 *Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte* (1789年) のなかで、歴史における進歩思想を掲げていたシラーにとって¹⁾、文化的な発展に停滞や後退をもたらす戦争や騒乱といった負の要素に対する歴史学的・精神史的な位置づけが必要であった。シラーは、現在を歴史的な発展の最先端に位置づけ、古代から現代へ向けて、さらに未来に向けて上昇線を描く理想主義的な歴史観を抱いてきた。しかし人類の歴史の歩みに往々にして訪れる負の出来事は、歴史の進歩を単なる直線状の発展思想で捉えることを、シラーに不可能にしていた。例えば、当時、フランスで起こっていた革命の暴走による社会の惨状は、シラーの確信に従えば文化の発展を目指すはずの人類の形成的な意志に反するものであって、獣性を理性の働きによって御していかなければならない人間存在そのものに対する失望と疑念が、ともすればシラーの脳裏に浮かぶのであった²⁾。しかし、それでもなお心の奥底で、シラーは文化的な営為が徐々にではあっても、あるいは前進と後退、停滞を繰り返しながらであっても、重ねられてゆくことを、信仰にも似た思いで、信じたかった。つまり、歴史の停滞や後退の後には、その負の要因を改革、あるいは除去する試みが人間自身の手によって、あるいは人智を越えた途轍もないものの差配によってなされる、とシラーは信じる —— その負の要因の改革や除去が、負の結果を引き起こす者の自滅行為によってであれ、他者による秩序回復の積極的な試みによるのであれ。文化は、直線的な上昇ではなく

でも、確かに進歩している、人類は自浄の意志を持つ —— もっとも人類が自己の人間形成と文化構築の意志を持つこと自体が、得体の知れない力の差配によるのかもしれないが —— これが『ヴァレンシュタイン』三部作の創作当時にシラーが抱いていた世界観であった。そして、今、負の結果を引き起こす者自身の自滅を契機とする秩序回復ということについて述べたが —— それはまた人智では捉えようのないもの、運命とも、ネメジスとも、あるいは必然ともいわれるものの力による支配としか言いようがないが ——、オーストリア帝国（神聖ローマ帝国）のA.v.ヴァレンシュタイン大元帥（Wallenstein, Albrecht von 1583 – 1634）の生の道程がまさにこれに当てはまる。ドイツにおける諸侯間の対立とオーストリア帝国の野望が複雑に絡み合った三十年戦争の時代に、ウィーンの帝室に対して反旗を翻したヴァレンシュタインの生き様に、シラーはこれまでの戯曲の主人公たちに寄せたのとは異なる関心を抱く。これまでに創作されたシラーの戯曲を概観するならば、人間的な心を失ってしまった社会に対する憤怒から、反社会的な行動に走ったカール・モーア（『群盗』*Die Räuber* 1781年）、暴政に走る専制政体の打倒を掲げながら、いつしか権力の奪取を目論んでしまうフィエスコ（『ジェノヴァのフィエスコの反乱』*Die Verschwörung des Fiesco zu Genua* 1783年）、貴族社会に蔓延る古臭い非人間的な掟に逆らって、市民の娘との恋を貫こうとするフェルディナント（『たくらみと恋』*Kabale und Liebe* 1784年）、絶対主義を固守するスペイン王室と宗教裁判に対して思想の自由を求め、世界市民的な思想に目覚めるカルロス（『ドン・カルロス』*Don Karlos* 1787年）、これらの主人公たちは、精神的にも実践的にも決して平穏な道程を歩むことはできないが、己の生の信念に基づいて行動を起こす —— 確かに道半ばにして、自らの心に潜む野望の魔手に絡め取られて破滅するフィエスコのような人物もいるが。ところが、戯曲『ヴァレンシュタイン』三部作で描き出されているヴァレンシュタイ

ンの生き様はどうかというと、「ヴァレンシュタインは高貴なものを持っておりませんし、彼は個々の生き方でも偉大ではありません。彼は品位やそういったものを持っておりません」(NA 28,204)と、作者シラー自身が指摘したこともあるように、ヴァレンシュタインはウィーンの帝室の不条理な扱いに対して謀反を決意するが、積極的な行動を起こそうとはしない。皇帝の存在を脅かすほどの軍事的・政治的な力を手中にし、また少なくとも彼の指揮下にある兵士や士官たちからはカリスマ的な声望を集めている割には、ヴァレンシュタインが的確な状況分析と己の固い決意に基づいて俊敏な行動に出ることはない。彼が往々にしてみせる現状認識の甘さや優柔不断な態度、そして占星術に頼ろうとする傾向をどのように捉えればよいのだろうか。ヴァレンシュタインは、シラーが生涯に亘る文化活動において説く自律的な精神の形成を目指す人物たちとは、幾分、軌を異にする存在といえる。しかし、不適切な状況判断や、優柔不断な姿勢といったヴァレンシュタインの過誤が、ヴァレンシュタイン軍と皇帝軍の全面的な戦闘を招かなかったことも事実だ。そもそも、占星術に頼りがちなヴァレンシュタインの生き方には、なにかしら運命的なものの支配さえ感じられる。人間社会に混乱を招きもするが、平和や幸福をもたらしもする力、時には悪魔的な力でもあり、時には神的な力でもあるもの、この得体の知れない途轍もない強い力を、シラーは探り出そうとするのか。しかし、本論の「(5)『ヴァレンシュタインの死』について」においてヴァレンシュタインの暗殺に言及するが、ヴァレンシュタインが星占い師の言葉を信じきらなかったことが彼の現実的な死を招いたことも事実だ。星占いでは彼の身に迫りくる生命の危機が予言されていたのだった。占星術に頼っているにもかかわらず、ヴァレンシュタインは何故に生命にかかわる大事に関してはその予言を無視するのだろうか。そこには、単に彼の性格に帰せられないもの、何か彼を破滅に導く人智を越えた力が働いているのではないだろう

か。B.v.ヴィーゼが「この戯曲で注目すべきことは、ヴァレンシュタインが彼の環境のなかで非常に様々に肯定的に、そして否定的に描かれていることだ。確かにここに、彼の姿が何か謎めいたもの、多面的なもの、汲み尽くされないものを持っていること³⁾」と指摘するように、この戯曲を性格劇とも、運命劇とも一義的に見做せない理由は、ヴァレンシュタインが示す不可解な生の姿勢と、彼の生の道程において何かしら運命的なものの差配が窺えることにある。また、戯曲創作の対象として選択しておきながら、シラー自身を襲う素材に対する関心の減退、つまり史実のヴァレンシュタインの生き様に対する失望感が見られるが、しかしそれでもシラーをして戯曲『ヴァレンシュタイン』の創作に走らせたものは何か。そこで、ヴァレンシュタインをはじめ、彼を取り巻く人々、特に彼の友人オクタヴィオや、オクタヴィオの息子でヴァレンシュタインを敬愛しているマックス、そしてヴァレンシュタインの娘でマックスの恋人テークラ等の心の変遷を追いながら、作者シラーの戯曲創作の意図を探りたい。

(2) 成立史⁴⁾

シラーの書簡や、シラーに宛てた知人の書簡等の記述を調べると、シラーが戯曲『ヴァレンシュタイン』の創作を思い立ってから劇場における初演や出版にこぎつけるまでに、十年近くの歳月が流れている。H.コープマンは、1791年1月12日付Chr.G.ケルナー（Körner, Christian Gottfried 1756－1831）宛書簡での記述——「今、私はもう一度幸せな気分でおります。なぜならば、エアフルト旅行以来、再度、悲劇創作の計画が頭の中で膨らんでいるからです。そして私は今、ずたずたになってしまった詩的な資質のために、ある対象を抱いております。長いこと、私は私をわくわくさせるような素材を探してきました。そして遂に一つ見つけました、しかも歴史的なものを」（NA 26,71）——を、『ヴァレンシュタイン』創

作の意図を暗示する最初の言葉と解する⁵⁾。そして1792年5月25日付ケルナー宛書簡で、シラーははっきりとヴァレンシュタインの名前を挙げて、「私は今、何か文学的なものの創作に着手する気になっております。特にヴァレンシュタインに筆を走らせたくてうずうずしています」(NA 26,141)と述べる。しかし当時、シラーの関心を引いたのは、ヴァレンシュタインだけではない。ヴァレンシュタインの敵役スウェーデン王グスタフ・アードルフ (Gustav Adolf 1594 - 1632) の生き様にも、シラーは強い関心を寄せる。国家の命運を左右するような人物の戯曲化を意図していたシラーにとって、グスタフ・アードルフは最適に思われたのだ。ところが、シラーは彼の創作計画から間もなく離れなければならず、そして同時にグスタフ・アードルフに寄せる関心が次第に薄れてゆく。三十年戦争で重きをなしたグスタフ・アードルフはシラーにとって確かに彼の創作意欲を惹起する格好の英雄だが、しかしそれにもかかわらず当時のシラーには、この素材を温めあげるだけの詩的想像の熟成がかなわなかったのだろう。1790年代前半のシラーといえ、詩的想像力の枯渇に苦悩する彼の姿が想起される。そもそも友人ケルナーの諫止の声を振り切って、シラーがイエナ大学の歴史学の教授に就任し、歴史学の研究で身を立ててゆこうとしたのも、シラーが己の詩的想像力の減退を自覚し、作家稼業に見切りをつけないければならないという苦渋の選択の結果であった。しかし、シラーが採った歴史研究の方法とは、十八世紀のドイツでも芽生えつつあった歴史哲学といわれるものだった。I.カント (Kant, Immanuel 1724 - 1804) やJ.G.ヘルダー (Herder, Johann Gottfried 1744 - 1803) にも窺えるこの歴史研究の方法は、歴史の解釈に理性的な考察を経た上での類推、あるいは詩的想像を積極的に参入させて、歴史的な資料によっては明らかにできない、あるいは歴史的な資料の作成者や管理者によって意図的に隠蔽されてしまった歴史の流れを探り出そうとする。この歴史研究の姿勢は、シラー自身も述べて

いるように⁶⁾、文学的な創作活動ほどではないにしろ、詩的な想像力を活かせる学問探究の道でもあった。しかも、シラーは歴史の研究を通じてヴァレンシュタインやグスタフ・アードルフといった国家的・世界的な事件に関わった人物に関心を寄せるようになり、また彼の詩的な想像力を再び醸成してゆくことになる。それ故、シラーにとってこの時期は、作家としては充電期間に当たるといえよう。しかも、この戯曲創作の仕事だけに、シラーは専心していればよかったわけではない。雑誌「ホーレン」Die Horen (1795-98年)の編纂、あるいは歴史書の執筆の仕事にも⁷⁾、シラーは時間と労力を割かなければならなかった。それどころか、こうした雑誌の編纂や歴史書の執筆はとても片手間でできる仕事ではなく、戯曲の創作活動に中断をもたらすことも往々にしてあった。また、この時期に、シラーがカントの哲学思想との接触を契機として、美学哲学への学的関心を次第に強めていることも看過できない。

こうした様々な活動のせいもあって、1793年から1795年にかけて、シラーの口から『ヴァレンシュタイン』の創作に関して積極的な発言はあまり聞かれない。しかし、1796年に入ると、この戯曲の創作に寄せるシラーの熱い思いが書簡でも度々窺えるようになる。1796年3月18日付J.W.v.ゲーテ (Goethe, Johann Wolfgang von 1749-1832)宛書簡で、シラーは『ヴァレンシュタイン』創作の意欲を伝えるとともに、戯曲の創作に関する助言を乞う⁸⁾。また、その三日後、同年3月21日付W.フンボルト (Humboldt, Friedrich Wilhelm Christian Karl Ferdinand von 1767-1835)宛書簡で、シラーは「私は、今、本当に真面目にヴァレンシュタインに取り組んでおります。そしてこの五日間を、いろいろな時に書きとめておいた考えをまとめることに向けました。確かにこの素材は偉大ではありませんが、しかし必ずしも重要でないわけでもありません」(NA 28,203)と述べ、『ヴァレンシュタイン』創作の意志を吐露する。さらに、本論の「(1) はじめに」で

も一部を引用した同書簡で、シラーは構想中のヴァレンシュタイン像の輪郭を示す。

「ヴァレンシュタイン —— まさに現実主義者として —— は、個々のことにおいてではなく、全体的に見た場合にのみ関心を惹起する人物です。私はこの機会に、現実主義と理想主義についての私の見解が、真に妥当だという幾つかの確信を得ました。そしてこれらの確信は、この文学的な構想においても同時に私を幸福へ導くでしょう。私が最近書いた論文のなかで現実主義について語ったことは、ヴァレンシュタインについても十分に当てはまります。ヴァレンシュタインは高貴なものを持っておりませんし、個々の生き方でも偉大ではありません。彼は品位やそういったものを持っておりません。しかし私はそれだけに純粹に現実的な道で、真の生の原理を含む劇的で偉大な性格を、彼のなかに築き上げようと思います。以前に私はポーザやカルロスに窺えるリアリティーの不足を、美しい理想性によって補足しようとしたことが、ここ、ヴァレンシュタインでも私はそうしたことを試してみるつもりです。そしてリアリティーそのものによって、不十分な理想性（つまり情感的な理想性）の補いをつけるつもりです」。
(NA 28,204)

やや長きにわたってシラーの書簡の文面を引用したが、こうした記述をみると、シラーは史実のヴァレンシュタインにはそれほど魅力を感じていないように思われる。なお、この書簡で、シラーは現実主義と理想主義に関心を寄せ、論文を書いた由を記しているが、それは『素朴文学と情感文学について』 *Über die naive und sentimentarische Dichtung* (1795/96年) で一章を設けて当該テーマについて論じていることを指す。確かに、『群盗』のカール・モーアの人物像に窺えるように、シラーは若い頃から、たとえ

社会的には罪と見做されようとも、人間性を失ってしまった因習や法に束縛されることなく、己の心が求めるままに、熱い血をたぎらせて生きる、いわゆる崇高な犯罪者に関心を向けてきた。しかしこの度は、むしろ、崇高な犯罪者としてヴァレンシュタインを偉大な存在に創りあげるのではなく、国家の安寧のためという大儀を掲げているものの、その実、事の遂行にあたっては的確な状況判断を下せず、優柔不断な態度に終始するといったような、必ずしも人間的・道徳的に肯定できない姿勢を示す人物であっても、洗練された文学的な描写によって、真に悲劇的な結末を辿る人物を創り上げることに、シラーは心を配る。N.エラースが「シラーはヴァレンシュタインに当初はそれほど魅了されなかったようだ。崇高な犯罪者として彼を偉大にするのではなく、人間的なものに乏しい彼を詩的な手段で悲劇的な価値へ高めようとしたのだった。シラーは現実的な描写が十分に詩的でさえあるならば、他の文学と同様に悲劇においても、道徳的な価値や世界観的な価値を二次的に見做してもかまわない、という考えを持っていて、不可能なことをしようとしたのだった⁹⁾」と的確に指摘するように、シラーは、描写が非常に巧みならば、たとえ主人公の行動に人間的・道徳的に問題があったとしても、道徳的な価値などというものを凌駕し、主人公に何らかの高尚な価値を付与できるにちがいない、と考え違いをしている節がみられる。しかし、またしても『ヴァレンシュタイン』創作の仕事に中断がもたらされる。シラーは雑誌「ホーレン」の仕事に加えて、さらに雑誌「ムーゼン・アルマナハ」*Musen=Almanach* (1796-1800年)の編集執筆とゲーテの戯曲『エグモント』*Egmont* (1787年)を改作することに忙殺される。特に、ゲーテのたつての要望による『エグモント改作』*Goethes Egmont* (1796年)の仕事で得た戯曲作家としての経験は、後に——『ヴァレンシュタインの陣営』における兵士たちの描出に窺えるように¹⁰⁾——シラーの創作活動に役立つことになるとはいえ、シラーに時間

的にも、労力的にも重い負担を強いたのだった。

また、歴史上のヴァレンシュタインに関する素材をそのまま悲劇に役立ちえるものにするには困難があった。第一にヴァレンシュタインの人格に問題があった。確かにヴァレンシュタインは彼の破滅に責任があった。しかしまさにそれ故に、彼の最後は悲劇としては捉えられない。現実主義的な考え方をするヴァレンシュタインは、理想主義者カルロスとは異なる。1796年11月28日付けでゲーテに宛てた書簡で、シラーは「素材は私に全く関心を引き起こしませんが、私は対象に対するこのような冷たい気持ちを仕事に対するこのような温かい気持ちに結び付けたのでした、と申し上げたいところです」(NA 29,15)と、創作活動に寄せる熱意を強調しているが、素材に対しては冷ややかな気持ちを隠そうとしない。シラーは素材に寄せる感激を失っている。さらに同書簡で、シラーはヴァレンシュタインと戯曲の筋の展開との関わりについて、「本来の運命はまだ余りにも影響が少なく、そして主人公自身の過誤が余りにも多く彼の不幸に作用しております」(NA 29,15)と書いている。ヴァレンシュタインの人格的な欠陥、つまり国家の命運の鍵を握っている人物に仕上げるには、決断力の欠如、状況判断の甘さ等の英雄らしからぬ性格に問題があった。また、ヴァレンシュタインの運命が彼の軍隊とあまりに密接に結びついているために、つまり彼が現実的な生の基盤を置いている軍隊、しかも一步間違えば無頼の輩に等しい行動を取りかねない下級兵士たちの集団のなかでのみ偉大だと見做されていたに過ぎないことから、悲劇に仕上げるには無理があった。ヴァレンシュタインの没落は、『ドン・カルロス』のカルロスのように、私的な愛の情念を世界市民的な情熱へ昇華させた理想主義者が、理想の高みから現実の奈落へ沈むのとは異なる。結局、シラーには、ヴァレンシュタインの没落は彼自身の過失に過ぎなかった、としか考えられなかった。シラーは、前記のゲーテ宛の書簡と同じ日(1796年11月28日)

にケルナーに宛てて書いた書簡でも、「私はもう一度真面目にヴァレンシュタインを温めております。しかし相変わらずこの不幸な作品は形が定まらずに、決着が付かずに私の前に置いてあります」(NA 29,16)と、創作に苦しむ胸のうちを告げる。

こうした素材の欠陥を補い、シラーに戯曲『ヴァレンシュタイン』の完成への道を開いてくれたのは、ゲーテであった。つまり、シラーは現実主義者ヴァレンシュタインを描出するためには散文による表現法を選択していたのだが、散文から韻文(ヤンブス)に文体を変えることに、ゲーテの存在が大きく影響する。散文で書くことを断念し、韻文で書くことを決意したシラーは、1797年11月24日に次の書簡をゲーテに送る。

「現在、私が手がけている仕事では、韻文を用いることで素材と形式が、外的な面でも、うまく関係しております。こんなことはこれまでありませんでした。私が散文を詩的な=律動的な言葉へ移して以来、私は以前とは全く異なる裁判権を行使しております。散文の使用によって本当にうまく収まったように見えた多くのモチーフも、今では必要ありません。……リズムは戯曲制作に際して偉大で重要なことを行います。つまり、リズムは、全ての登場人物と全ての状況を一つの法則に従って取り扱い、そしてそれらの内面的な相違にもかかわらず、一つの形式でそれらを作り上げることによって、さらにそのように特徴的で様々な全てのものから、何か普遍的なもの、純粹に人間的なものを、詩人と読者に強く求めさせるのです」。(NA 29,159f.)

さらに、1798年9月、作品の統一に難渋するシラーは作品を三部構成にすることを決意し、出版者J.F.コッタ(Cotta, Johann Friedrich 1764-1832)に伝える¹¹⁾。先行研究は、この場合もゲーテの助言が功を奏したことを指

摘する¹²⁾。残念ながら筆者はゲーテの助言が記されたシラー宛のゲーテ書簡を確認できなかったが、この点については先行研究の解釈を貴重な研究成果として受け入れたい。こうして、この作品は、ゲーテの希望もあって、1798年10月12日に予定されていたワイマール劇場の改装記念公演に間に合うように、その完成が急がれる。その結果、当該劇場の記念公演日のまさに直前に、『ヴァレンシュタインの陣営』が『プロローグ』と呼ばれていた部分を添えて出来上がり、無事、同日（10月12日）初演の運びとなる。

さらに、『ヴァレンシュタインの陣営』の初演の三ヶ月後、シラーは第二部『ピッコローミニ父子』を仕上げることができた。しかし、第二部が完成を見るには大きな壁を越えなければならなかった。シラーは1798年12月4日にゲーテに宛てて「『ピッコローミニ父子』を膨らますために、私は占星術のモチーフの選択を決意する必要に迫られました。占星術のモチーフによってヴァレンシュタインの没落が導かれ、また彼の心のなかで計画の成功に寄せる強い確信が目覚めさせられるはずです」(NA 30,8)と伝える。実は、シラーはそう簡単に占星術のモチーフの導入を決めたわけではない。なぜならば、戦場で数々の武功をたて、実践的な政治の世界で辣腕を振るったヴァレンシュタイン、いわば現実の世界で最高級の功績を挙げてきた人物を、まかり間違えば妄想の世界に引きずり込みかねない占星術に結び付けることなど、シラーの理解をもってしては、容易には受け入れられなかった。しかも、占星術という理性に基づかない想念の産物を引き合いに出す、いわば妖術のモチーフを持ち込むことによって、「馬鹿げた悪趣味と、真剣かつ聡明なこととの混合が、人に不快感を与え」(NA 30,9) かねないことを、シラーは恐れたのだった。しかし、その一方でシラーは、占星術的な考え方がヴァレンシュタインの時代の世界観に沿うことも理解していた¹³⁾。そこで、あれこれ逡巡するシラーにゲーテは助言を与える。1798年12月8日付書簡で、ゲーテはシラーに次のように述べる。

「占星術的な迷信は、恐ろしい世界全体に対する暗い感情に基づいてお
ります。経験は、一番近くにある星が天候や植物の生長等に決定的な影響
を与えることを、語っております。人は段階的にだけ常に上に向かって進
めるものでして、そしてこの影響がいつ止むのかは言えません。天文学者
が至る所で他の星による星の拡散を見ているとしても、また哲学者が、必
然的に最も離れたものへの作用を想像する傾向があるとしても、人間は己
自身の予感のなかでほんの少しだけ先へ歩み、こうした方向を道徳的なも
の、幸福、不幸へ広げることが許されるのです。こうした想念を私は迷信
と呼びたくありません、それは常に私たちの本性の近くにあり、何らかの
信仰と同様に我慢のできるもの、許されるものです¹⁴⁾」。

こうして、シラーは、占星術のモチーフを彼の戯曲に取り入れることにな
る。ただし、不承不承であって、この後も W.フンボルト宛の書簡等では、
愚痴にも似た発言がみられる¹⁵⁾。その占星術の場面で始まる第三部『ヴァ
レンシュタインの死』—— ただし、発表当時は『ヴァレンシュタイン』
と題されていた —— の完成をみるのは、1799年3月のことだった。そし
て1800年6月末には、コッタ出版社から第一部と第二部が出版される。ま
さに、『ヴァレンシュタイン』三部作は、シラーとゲーテの相互的な創造
的啓蒙の結実の一つといえる。

(3) 『ヴァレンシュタインの陣営』について

『ヴァレンシュタインの陣営』は十一の場でのみ構成されていて、幕立
てがなされていない。場面はすべてヴァレンシュタインの連隊の陣営内で演
じられている。この連隊はベーメン国のピルゼン郊外に陣を敷いている。こ
のプロローグでヴァレンシュタインの人物像が兵士たちの口を通して伝えら
れる。彼は幸福の女神に導かれて人生の表街道を歩む大將軍としてだけでなく、

悪魔とも結託して得体の知れない闇の世界にも通じている者としても描かれている。兵士たちがヴァレンシュタインに寄せる感情には、彼の軍人としての雄々しさや華々しさに対する尊敬とともに、健全な常人とはどこか異なり、摑みどこのない悪魔的な人柄に対する畏怖も感じられる。しかも、シラーはヴァレンシュタインが犯す謀反の罪——皇帝派から見た場合だが——の半分を不幸な星のせいにしたのだった。ヴァレンシュタインの性格のみならず、不幸な星が彼を破滅に導くのだ。それ故、予測不可能な摂理、見通せない運命の働きかけが、ヴァレンシュタインの生を左右する大きな要因として仄めかされている。ヴァレンシュタインは行動の基盤を軍隊においている。軍隊には様々な土地から、実に様々な経歴の持ち主が流れ込んでいる。兵士たちは非常に様々な理由から、ヴァレンシュタインのもとに集まっているが、それらの理由のなかで特に目立つのはヴァレンシュタインに寄せる尊敬の念というより、彼の周りに屯していれば、彼らの物欲や、ときには性欲が満たされるだろうという期待であった。確かに、戦場では命のやり取りが強要されるが、しかし、今や日の出の勢いを示すヴァレンシュタインの軍隊に属していれば、いろいろと思いつくことなく、たとえ不道德的なことであっても、欲求が満たされるのだ。勝ち星に恵まれた偉大な将軍としてカリスマ的な存在にさえなっていること、つまり数々の武勲を挙げ、皇帝さえも彼の軍事的な才のみならず政治的な手腕にも頼らざるをえないという現実が、ならず者に等しい下級兵士たちの心を惹きつける。詐欺師や博徒、そして食い詰めた農民といった前歴を持ち、軍隊の掟という足枷が外れれば無頼の輩にいつでも変わりうる下級兵士たちにとっては、正義も、国家の秩序も、神に寄せる信仰も念頭にない。彼らは、皆、ヴァレンシュタインが彼らに保証しているように見える現実的な実入りをあてにしている。ただし、兵士たちは幸福という言葉を頻繁に口にする。無頼の輩といえども、彼らはそれなりの幸福生活を夢見ている。

兵士たちにとってヴァレンシュタインがカリスマ的な存在だと既述したが、このことについてH.ラインハルトは「ヴァレンシュタインのカリスマ的な作用は、彼が常に何かを背後に隠しているという印象を与える、つまり彼の掴みがたい自己を¹⁶⁾」と指摘する。確かに、次の兵士たちの会話からも、ヴァレンシュタインを悪魔の相棒として畏怖しつつも、幸運に恵まれている彼のおこぼれに預かり、短くとも太い人生を渴望する兵士たちの気持ちが窺える。

第一の獵騎兵：

「冗談だろう。あの方が指揮している限り、離れるなんてとんでもない。兵士は何処でここ以上に良い買い物ができるだろうか。ここでは全てのことが戦争の掟に従っている。全てのことが大胆だ。……禁止されていないことは、何をやっても構わない。何を信仰しようと、誰も何も言わない。そもそも、軍隊に所属しているか、していないか、二つのことだけが問題なのだ。そしてわしは軍旗にだけ義務がある」。(1部。6場。NA 8,22)

あるいは、

第二の獵騎兵：

「彼（ヴァレンシュタイン）は幸福を呪縛している。幸福は彼の傍にあるに違いない。彼の指揮下で戦う者は、特別な力のもとにいるのだ。実際、将軍が悪魔を地獄から金で連れてきたことを、この世の誰もが知っている」。(1部。6場。NA 8,23f.)

しかも、ヴァレンシュタインが占星術に凝っていることは、彼と得体の知れない世界、特に悪魔の世界との繋がりを兵士たちに想起させ、彼のカリスマ性を高めている。

曹長：

「皆が言っているが、ヴァレンシュタインは星を見て、近くや遠くの将来のことを読み取るそうだ。わしはそのことをもっとよく知っている。灰色の服を着た小男が、夜に鍵のかかった戸をすり抜けて、彼のところによくやって来る。歩哨が度々誰何したものだ。そしてあの灰色の服を着た奴が来ると、いつもとんでもない事が起こったものだ」。

第二の獵騎兵：

「そうだ、彼は悪魔に身を委ねた。だから、おれたちも楽しい生活を送ってられるのだ」。(1部。6場。NA 8,24)

兵士たちはヴァレンシュタインについて詮索すればするほど、掴み難いヴァレンシュタインの姿に出くわし、ますます不可思議な彼に惹かれてゆく。そしてこの將軍は、まるで豊富な経験から得られた人生訓であるかのように、しかしその実は星占いという呪術に基づく妄想の産物を持ち歩き、現実と妄想の世界を絶えず行き来している。一方で軍隊の最上位にいる將軍が妄想を現実の世界に持ち込むかと思うと、他方で軍隊の底辺にいる下級兵士は現実の瞬間的な生だけに関心を向けている。つまり、ヴァレンシュタインの軍隊に所属する者たち、特に兵士たちは、ヴァレンシュタインが披瀝する妄想によって作り出された世界像を、現実と誤認して受け入れている。しかも、ヴァレンシュタインの威光を笠に、平和時には享樂の生活にふける兵士たちは、日々黙々と労働にいそしむことを蔑んでいる。もっと始末の悪い輩は、自らの野卑な欲求と暴力的な行為を承知したうえで、農民や商人、そして町の人々を威圧している。例えば、「兄弟、天におわします神様を皆が同時に称えることはありえない。ある奴は、他の奴を苦しめる日照りを望み、あっちの奴が湿らそうとするものを、こっちの

奴は乾かそうとする。……おれたちが町の者や農民を犠牲にしていることは、事実だ。気の毒に思う。しかし、どうしようもない」(1部。11場。NA 8,48)と述べる第一の甲騎兵、あるいは「七名の部下を連れた兵士が、ある村で遠くから見受けられる。彼はその村で、その村を意のままに支配し命令をくだす。畜生。村の奴らはおれたちを好いていない。まるで悪魔の顔を見ているかのようにして、おれたちの顔を見る」(1部。11場。NA 8,40)と話す曹長、それでも彼らは兵士稼業を止めようとしめない。兵士たちは民衆と一線を画した「恐ろしい一群」(1部。11場。NA 8,40)を形成している。つまり、ヴァレンシュタインがその力の実践面での基盤としていた軍隊は、生活苦に喘ぐ町の人々や農民を脅かす身勝手な存在であることを、忘失してはならない。例えば、『陣営』の最後の場面(11場)で、兵士たちは自らの自由な生き方を讃えるかのように、あるいは正当化するかのように、歌いあう。

第二の甲騎兵。歌う。

「ごきげんよう、仲間よ、馬に乗って、馬に乗って、戦場へ、自由のなかへ進め。戦場のなかで男はさらに価値があがる、そこでは心臓はさらに高鳴る。そこでは誰も代役を務めない。全く自分ひとりを頼りに立っている」。

背景から進み出た兵士たちがこの歌の間に集まり、合唱隊を作る。

合唱隊：

「誰も代役を務めない。全く自分ひとりを頼りに立っている」。

竜騎兵：

「自由が世界から消えてしまった。主人と下僕がいるだけだ。臆病な輩を欺瞞と姦策が支配する。死を直視できるのは、兵士だけだ。兵士だけが

自由の男だ」。

合唱隊：

「死を直視できる者、兵士だけが自由の男だ」。

(1部。11場。NA 8,52)

こうした兵士たちの屈折した感情を支えているものは、被支配層に属してはいるが、最下層には属していないというプライドだろうか。兵士たちは、軍隊という集団のなかでは、上位者、すなわち将校の命令に服従しなければならない身ながら——しかも、戦場では命のやり取りをしてまで——社会全体においては、彼らの暴力的な行為の前には黙して服する階層、例えば農民や商人が存在するという歪んだ優越感に浸っているのだろうか。こうした荒々しい兵士たちの言葉のやり取りを見ていると、『群盗』においてカール・モーアのもとに集まっている盗賊たちのことが思い出される。人間的な心を失った固陋な社会に対する反発から結成したはずの盗賊団には、暴力行為そのものを楽しむ無頼の輩も紛れ込んでいた。時にはその無頼の輩が盗賊団を煽り、非道な行為へと駆り立てることもあった。確かに、町を焼き払い、町の人々に危害を加える場面そのものが直接的に描出されることはないが、しかし暴力行為の余韻に浸る彼らに世直しの義賊の姿はなかった。彼らは他者を支配、抑圧する優越感に酔いしれていた。まさに、あれらの無頼漢が示した暴力的な生き様が、『ヴァレンシュタインの陣営』の兵士たちにも窺える。確かに、シラーは、反骨精神たくましい若者が発する自由な生き方を求める叫びや、国王や女王の身分にある者が抱える高貴な身分に生まれついたが故の孤独な心の葛藤だけでなく、盗賊や下級兵士等、社会の下層で生きることを余儀なくされている者たちの声の描出にも、その創作の才を発揮している。しかし、この『ヴァレンシュタインの陣営』におけるほど、シラーが社会の最下層で息を潜めながら

生きている人々の心に触れたことはあっただろうか。無頼の兵士たちの暴力や脅迫に苛まれる人々、まさに社会の最下層で怯えながら、それでも日々黙々と勤労を続ける人々の心に触れたことはあっただろうか。第一部『ヴァレンシュタインの陣営』は、将来どころか明日についてさえ思い煩うことなく、現在の幸せを享受する兵士たちの快活さ、陽気さが支配的だが、彼らの単純な明るさのもとでかき消されている声なき声が、どこからともなく聞こえてくるようだ。H.フルマンが「社会の最下層からの批判的な思弁が挿入されている。つまり住民の間で広まっている飢餓と悲惨な状況に対する農民の訴えが挿入されている。この農民の基盤の上に、兵士や士官、領主や将軍に代表される社会的なピラミッドの階層が築かれている¹⁷⁾」と的確に指摘するように、軍隊の下層部に属する下級兵士さえからも、抑圧を受けている最下層の人々の姿が見え隠れする。確かに彼らが戯曲の筋の展開に関与することはないが。

このように、十七世紀の悲惨な世相を示す描写を織り込みながら、第一部『ヴァレンシュタインの陣営』は全体としては筋の展開などなく、次の第二部の開演を準備する一枚の明るい絵画を、陣営の喧騒のなかで提示している。

(4) 『ピッコローミニ父子』について

第二部『ピッコローミニ父子』は五つの幕で構成されている。舞台は、第一部『ヴァレンシュタインの陣営』が演じられた町の外の陣営から町なかに、ピルゼンの市庁舎の古いゴート様式の広間に移されている。第一部『ヴァレンシュタインの陣営』では、ヴァレンシュタイン自身の登場がなくとも、兵士たちの言葉によってヴァレンシュタインの人物像が描かれるとともに、兵士たちのしたたかな生活観も明らかにされたが、第二部『ピッコローミニ父子』ではヴァレンシュタインとピッコローミニ父子（父オ

クタヴィオと息子マックス) がハンドルングの前景に立つ。しかも、もしもマックスがいなければ、この第二部はヴァレンシュタインとオクタヴィオの間で闘わされる対立の構図のもとに、政治的・軍事的なハンドルングだけの重苦しい展開になったことだろう。マックスの存在によって、この第二部は冷たい政治的な世界のなかで人間的な温かみのある心と道徳律に根ざす信義の心が、まるで闇夜で光る一個の小さな灯火のように、輝きを放つ。さらにヴァレンシュタインとの関わりの中で、上級将校たちの人生観や処世術も明らかにされてゆく。兵士たちの粗野だが、単純明快な考え方と違って、上級将校たちはヴァレンシュタインに忠誠を誓っているかと思うと、絶えずウィーンの宮廷の動向に気を配りながら、身の保全と栄達を図っている。軍事的に、また政治的に強い影響力を持つようになったヴァレンシュタインは、自らが率いる軍隊を、見たところは完全に掌握しているように見える。ヴァレンシュタインが率いる軍隊は、国家のなかに一つの独立した国家を形成しているような感じさえ与える。それほどに、ヴァレンシュタインのみならず、将校たちは己が所属する連隊に寄せる誇りは高い。しかし、実のところ、将校たちは、ヴァレンシュタインの指揮下に属しながらも、軍人としては皇帝に忠誠を誓い、皇帝から任命を受けた身なのだ。それ故、ヴァレンシュタインと皇帝の関係が良好なあいだは、彼らは所属の軍隊内で忠勤を励めば、事足りた。しかし、ウィーンの帝室の処遇に対する不安からヴァレンシュタインがベーメンの支配に触手をのばすようになって以来、ウィーンの宮廷とヴァレンシュタインのあいだで次第に緊張が高まってきているだけに、彼らはこのままヴァレンシュタインと行動を共にするか、ウィーンの宮廷に駆け込むか、去就を決めかねている。それどころかこの機会に身の栄達を図る将校たちのあいだでは、相互に腹の探りあいが始まり、次第に重苦しい空気が広がってゆく。しかも、彼らのなかには竜騎兵連隊の連隊長ブットラーのように、密かにヴァレン

シュタイン殺害の機会を狙っている者もいる。ブットラーはかつてヴァレンシュタインのせいで出世の機会を奪われたことがあり、その恨みを晴らす機会を狙っている。こうして、ヴァレンシュタインの権威が危ういものになってゆくにつれ、将校たちのあいだでは、それまで押し殺していた不平不満も表面化する。権力の前にはひれ伏し、あるいは押し黙るが、しぶとく生きる人間の心の一面をシラーは描き出す。皇帝さえもヴァレンシュタインの軍事的・政治的な力に対しては、一目おかざるをえないこともあったほどだが、その彼の力の基盤である軍隊が内部から分裂・崩壊する危機の状況にあることは、ヴァレンシュタインの存在を支える土台がいつ崩壊してしまうか分らない危険のなかにあることを意味する。しかも、ヴァレンシュタインは、自らの進み行く道を決めることに悩み、躊躇を繰り返すだけに、将校たちの心の揺れも次第に大きくなり、兵士たちの、乱暴だが、快活さや陽気さが支配的な第一部『ヴァレンシュタインの陣営』に比べて、第二部『ピッコローミニ父子』にはある種の緊張感と陰湿な雰囲気漂う。

次第に予断を許さなくなってきた政治的な状況を探るために、上級将校たち、イロー、ブットラー、イゾラニ、テルツキ、そしてオクタヴィオ・ピッコローミニは、ピルゼンに集まる。確かに、彼らはヴァレンシュタインの軍事的な才や人柄に敬服しているようにみえる。しかし、皇帝の権威に対する畏怖の念が、ヴァレンシュタインに寄せている尊敬の気持ちを次第に切り崩してゆく。シラーは、彼の文筆活動を封じ込めようとした領主カール・オイゲン公 (Carl Eugen 1728 - 93) に反抗して故郷の地を出奔するという青年時代を経てきたが、この戯曲においては、もはや支配層に対する対抗心を前面に押し出すことはない。むしろ、皇帝や帝室の権威が持つ底知れない不気味な影響力を、シラーは仄めかす。オクタヴィオもまだ最初のうちは、皇帝の使者クヴェステンベルクがもたらしたヴァレンシュタインに対する謀反の嫌疑を信じていないが、しかし間もなく、クヴ

ェステンベルクの老獺な懐柔策に乗せられてゆく。現実主義的な生き方をしているオクタヴィオは、ヴァレンシュタインの形勢不利とみるや、ヴァレンシュタインに対する忠誠の姿勢を密かに放棄する。ヴァレンシュタインのカリスマ性をもってしても、伝統に守られ、侵しがたい威厳を誇る皇帝の権威にはかなわないことを、オクタヴィオは冷静な現状認識から悟る。オクタヴィオは友情や家族愛といった感情に囚われることなく、軍人としての義務の履行を重んじる。B.v.ヴィーゼはオクタヴィオの人柄について「オクタヴィオは国を救おうとする。彼は彼の皇帝に仕えようとする。彼は、悪意からではなく、善事のために術策をめぐらせる。……オクタヴィオは皇帝の権威の賢明な機能として行動する。しかし、彼は決して人格者としては行動しないし、父親としても、友人としても行動しない¹⁸⁾」と、あるいは「オクタヴィオの倫理的な立場は、自由に決定する個人のものではなく、たとえ道徳律に反する政治的な行動であっても、義務として課せられた客観的なことには貢献しなければならない組織内の成員としてのものである¹⁹⁾」と、的確に分析する。このようなオクタヴィオと対照的な生き方をしているのが、彼の息子マックス・ピッコローミニだ。両者の生に対する姿勢の違いは、まもなく明らかになる。第一幕第四場で、オクタヴィオとクヴェステンベルクがヴァレンシュタインを失墜させるために策をめぐらそうとしている場に、マックスが登場するや、ヴァレンシュタインを偶像化さえしている理想主義者マックスの生の姿勢が明らかになる。そして遂にマックスの口から、ウィーンの宮廷に対して闘う決意が語られる。それはまたヴァレンシュタインに寄せるマックスの絶対的な信頼の念の吐露を意味する。マックスは皇帝への忠誠を求めるクヴェステンベルクに向かって叫ぶ。

マックス。激して彼（クヴェステンベルク）の方を向きながら。：

「ウィーンのあなたたち以外の誰のせいですか。私ははっきりとそのこ

とを申し上げます、クヴェステンベルク伯。以前にあなたを見たとき、不快な気持ちが私の心をビクッとさせました。平和を妨げているのはあなたたちです。……さあ、立ち去ってください、行ってください。—— 良いことを愛すると同様に、私はあなたたちを憎みます。—— ここで、私は誓います。あなたたちが彼の没落を嬉々として招く前に、彼のために、このヴァレンシュタインのために、私は私の血を、私の心臓の最後の一滴まで、一滴一滴、次々に注ぎます」。(2部。1幕4場。NA 8,80f.)

理想主義者マックスは、ヴァレンシュタインと皇帝派の両方の側から、あるときは同志として、またあるときは敵対者として、彼らの謀議の渦のなかに引き込まれそうになる。確かに、マックスは愛の理想世界を心のなかで構築することによって、現実の政治的な世界から離れる。しかし理想の世界でのみ生きる者には、現実の世界での安寧は望めない。マックスを待ち構えている悲しい道程は、現実の世界では理想主義者に避けがたく襲い掛かる悲劇である。

第二幕第二場で、ヴァレンシュタインがようやく舞台に現れる。しかし、前述したように、シラーは、兵士たちや上級将校たちの会話を通して、このヴァレンシュタインの人物像について既に描き出していた。しかも、B.v.ヴィーゼが「このドラマで注目すべきことは、ヴァレンシュタインが彼の環境のなかで非常に様々に肯定的に、そして否定的に描かれていることだ。確かにここに彼の姿が何か謎めいたもの、多面的なもの、汲み尽くされないものをもっている理由の一つがある²⁰⁾」と指摘するように、ヴァレンシュタインが軍事的に、あるいは政治的に卓越した才能を備えた将軍というだけでなく、これまでの人生において善玉でもあり、悪玉でもあったことを、観る者は知らされているだけに、待ちに待ったヴァレンシュタインの登場ということになる。

ヴァレンシュタインは妻を伴っている。さらに、そこにヴァレンシュタインの娘テークラが加わる。彼女はマックスに連れられて来たのだった。B.v. ヴィーゼはこの場面について「政治的なものが家庭的なものと同様に絡み合っている²¹⁾」と指摘するが、高貴な身分に生まれついた者たちが背負っている宿命的ともいえる状況が、ヴァレンシュタインの親子関係に、そしてテークラとマックスの恋の道行きに窺える。『ドン・カルロス』が家庭悲劇であり、政治劇であったことが想起される。あの戯曲では王子カルロスと国王フィリップの親子関係、カルロスと義母マリーアの恋、そしてカルロスとポーザの友情に、つまり私的な領域にまで宗教裁判と一体化した絶対主義体制の掟が陰湿な監視の網を張り巡らして、彼らを悲劇の奈落へ沈めてしまう。『ドン・カルロス』では、スペイン王家の三名、国王フィリップ二世、王妃エリーザベト、そして王子カルロスが抱える家庭的な問題に政治的な事情が絡み合う悲劇が描き出されていたが、ヴァレンシュタインの一家についても同様なことがいえる。さて、ヴァレンシュタインは、彼の妻がウィーンの宮廷に伺候した際の王妃をはじめ、貴族たちの反応について彼女に尋ねる。ウィーンの宮廷から漏れてきた噂から、ヴァレンシュタインは彼の罷免が決定されているらしいことを既に知っている。そこで、ヴァレンシュタインは「太陽がわれわれを照らすことは、もはやない。今後は、われわれ自身の炎がわれわれを照らさなければならない」(2部。2幕2場。NA 8,87)と妻に決意を伝える。しかしそれでも彼は、皇帝に見切りをつけて反旗を翻すことが良策なのか、否か分からない。彼は自分が持っている力、軍事力を行使することが良いことなのか否かを決断できずにいる。軍事的にも政治的にも、人並み優れた人物として前評判の高かったヴァレンシュタインだが、実際に私たちの目の前に現れた彼は、優柔不断な側面を暴露する。B.v. ヴィーゼが「ヴァレンシュタインは戯曲の状況が先鋭化するときに、その場に居合わせない。歴史的な力と有

力者たちも彼に賛成したり反対したりしており、その上彼自身も自分の態度をはっきりさせない。そして奇妙にも彼は躊躇しながら背景に止まっている²²⁾」と指摘するように、こうした優柔不断なヴァレンシュタインの態度は戯曲全体を通して変らない。

義弟テルツキ伯爵にヴァレンシュタインは言う。

「皇帝がわしに悪意を抱いて悪く扱ったことは本当だ。その気になれば、わしはそれに対して当然多くの返報をすることができるだろう。自分の力を知ることは喜びだ。だが、わしが本当に力を行使するか、否か、そのことについては、他の者と同様に、おまえは何にも言えない、と思うが」。
(2部。2幕5場。NA 8,94)

ヴァレンシュタインは、かつて帝国の貴族たちの陰謀により大元帥の職を罷免され、後に国家存亡の危機に際して再び大元帥に呼び戻されて、国家を救ったことがあった。そして、今また、彼はウィーンの帝室から急に疎外されることになった。ヴァレンシュタインの勢力を弱めるために、彼が率いる軍隊の解散の噂がまことしやかに流れている。それに対抗するために彼はベーメンの地の支配権を皇帝に要求したのだった。しかしヴァレンシュタインは彼の要求が私心からでたものでなく、救国のためであることにこだわる。彼は次のように心の内を吐露してもいた。

「わしがドイツを分割し、分け前を着服するために、外国人に寝返ったなどという汚名を着せられてなるものか。わしをこの国は保護者として崇めなければならない。わしは帝国直属の領主らしく、立派に帝国の諸侯の列に加わろうと思う」。(2部。2幕5場。NA 8,93)

ヴァレンシュタインにとって、皇帝の繁栄と帝国の繁栄は同質でないことが窺える。彼は、皇帝という存在を国家機構の一機関——言うまでもなく、今で言うところの行政、立法、司法の全てにわたって絶対的な権限を持つ機関だが——と見做す思想を次第に抱くようになる。彼が忠誠を誓っているのは、私人としての皇帝ではなく、国家組織の頂点に位置する公人としての皇帝なのであった。彼が「わしは帝国直属の領主らしく、立派に帝国の諸侯の列に加わろうと思う」（2部。2幕5場。NA 8,93）と宣する真意は、皇帝個人の繁栄を願うことにあるのではなく、国家の平和と安寧を希求することにある。為政者の私欲のために引き起こされる不幸な戦争を終わらせ、新しい秩序を構築するために、つまり皇帝のためではなくて、国家のために行動することを、ヴァレンシュタインは決意する。しかも、無防備ともいえる腹藏なさで、彼は皇帝の使者クヴェステンベルクに彼の考えを明かす。

「国家を犠牲にして王座に仕えることがわしに悪い結果をもたらして以来、わしは国家について他の考えを抱くようになりました。勿論、この元帥杖は皇帝からいただきました。しかし、今や、わしは帝国の将軍として、皇帝の関心が皆の幸福、全体の至福に向かうように導きます。そして彼個人のために、彼が勢力を拡大するようには導かないつもりです」。（2部。2幕7場。NA 8,106）

国家の救済を実現するために、ヴァレンシュタインは、スウェーデン軍と手を結び、さらにスウェーデン軍と手を結んでいるザクセンと同盟することが必要だ、と考える。——ただし、ヴァレンシュタインはこの考えを実現に向けて積極的に推し進めるわけではない。かといって、彼はその考えを全くの妄想にすぎないとして葬り去るわけでもない。そこには逡巡

するヴァレンシュタインの姿が窺える。彼の腹心たち、イロー将軍とヴァレンシュタインの義弟テルツキ伯爵等がスウェーデン軍との交渉という実行的な行動へと彼を駆り立てるが、それでも彼は躊躇を繰り返す。第一部『ヴァレンシュタインの陣営』で兵士たちが描き出したヴァレンシュタイン像とは異なり、行動しないヴァレンシュタインの姿がそこにある。

こうして、ヴァレンシュタインの口から皇帝との確執と謀反の計画が次第に明かされてゆくが、実は、ヴァレンシュタインが始めて登場した第二幕第二場で、既に彼は権力への野望を抱いていた。ヴァレンシュタインが妻を伴ったこの登場の直後に、ヴァレンシュタインの娘テークラもその場に加わり、久しぶりの父と娘の再会が実現する。「あなたが皇帝のために大軍を起こして出兵されたとき、彼女はまだ頑是ない子供でした。その後、あなたが出征から、ポンメルンから故郷に帰られたとき、彼女は修道院で修養中でした」（2部。2幕3場。NA 8,88f.）と述べるヴァレンシュタイン夫人の言葉にも窺えるように、ヴァレンシュタインは多年に亘り妻子と離れた戦陣暮らしを余儀なくされてきたのだった。ヴァレンシュタインは年頃になった娘の成長に心から喜びの気持ちを表す。しかし、喜びに満ちた彼の言葉の端はしに、権力への野心も窺える。ヴァレンシュタインは美しく成長した娘の姿に感動して言う。

「わしは、運命がわしに息子を授けることを拒否したことで、運命に腹を立てた。息子ならば、わしの名前と幸福を引き継ぎ、諸侯の誇りある列のなかで、束の間に消えてしまうわしという存在を、生きながらえさせることができるのだがと。わしは運命に悪いことをした。わしは、この娘の花咲く頭の上に、戦いの日々で得た花冠を置こうと思う。わしがいつかそれを王冠の飾りに変えて、この美しい額を飾るために戦うことができるなら、わしの骨折りも無駄ではなかったのだ」。（2部。2幕3場。NA 8,89）

P.A.アルトが「私的な描写 —— テークラ、マックス、そして妻に対する関係のなかで —— が將軍の公的な姿を補足するところでも、常に政治的な思考が優位を占めている。〈粹で市民のように〉 (NA 8,243) 心の声に従う〈優しい父親〉 (NA 8,243) としてではなく、権力者の姿勢で彼は娘に対して²³⁾」と指摘するように、「戦いの日々で得た花冠」を「王冠の飾りに変えて」、娘の頭を飾りたいと願うヴァレンシュタインの発言は、娘の幸福を願う親心を表しているだけではない。むしろヴァレンシュタインは己の勢力の拡大を狙い、権力の座に就くことを狙っている。彼のこの野心は第三部『ヴァレンシュタインの死』の第三幕第四場でもっとはつきりする。ヴァレンシュタインは、娘テークラがマックスに恋心を抱いていることを知り、愕然とする。マックスとの縁組を勧める妻に向かって、ヴァレンシュタインは「考えても見ろ。なんだって。彼 (マックス) は臣下だ。わしは娘婿をヨーロッパの王族から探すつもりだ」(3部。3幕4場。NA 8,242)、あるいは「彼女は、この地上でわしに残された唯一人の者だ。わしは彼女の頭上に王冠を見たい。そうでなければ生きていたくない」(3部。3幕4場。NA 8,242)と叫ぶ。実は、ヴァレンシュタインが難色を示す彼の娘テークラとオクタヴィオの息子マックスの恋は、我が身の保全と栄達、そして腹の探りあいを続ける高級将校たちの人間模様が展開されるこの戯曲においては、荒地に咲く一輪の花のように、私たちの心に清々しい人間信頼の情を醸成してゆく。そこで、この二人の愛の道程については、一項を設け、本論の「(6) マックスとテークラ」で考察を加えてゆくこととし、ここでは、ヴァレンシュタインの野心を暗示するものとして、前記の彼の言葉を挙げておく。

こうして、ヴァレンシュタインが皇帝からの離反を心に決めながらも、その実行に躊躇している間に、オクタヴィオの巧みな手引きの下で、皇帝派がヴァレンシュタインの軍隊内で密かに形成される。そこで、ヴァレン

シュタインの腹心イローとテルツキは皇帝派を封じ込め、軍隊内での結束を確かなものにするために、策謀をめぐらす。後に『マリーア・ストゥアルト』*Maria Stuart* (1800年)において、シラーは、イギリス女王エリーザベトが権力の保持のためには忠臣をも冷酷に切り捨ててゆく様、つまり彼女の奸智に長けた政治手腕を描き出すが、この『ヴァレンシュタイン』三部作においても、野望渦巻く政治的な駆け引きを巧みに創出している。全ての上級将校は、宣誓書に署名するという形で、ヴァレンシュタインに忠節を誓うことが求められる、ただし、その宣誓書には、「皇帝に対して行ったわれわれの宣誓が許容する限りで」(2部。4幕1場。NA 8,137)という条件が付けられるはずであった。その説明は酒宴の前に、イローとテルツキから連隊長たちになされたのだった。ところが、その宣誓書は、宴会の騒ぎに紛れて、形式が変えられて、つまり条件文なしで、署名に付せられたのだった。ほとんどの者は何も気付かずにいたが、オクタヴィオ・ピッコローミニだけは宣誓書の偽造に気づきながらも署名をしたことが、オクタヴィオ自身の口からまもなく明らかにされる。ヴァレンシュタインの対抗馬に相応しくオクタヴィオには冷静な政治的眼識が付与されている。そしてもう一人、忘れてならない人物がいる。それはオクタヴィオの息子マックスだ。マックスだけが署名しなかった。彼は疲労のあまり、自らの思考力に確信がもてなかったので、署名を保留したのだった。ヴァレンシュタインに対する疑念や反抗からではなく、自らの行動に対する責任感からとったマックスの所業であった。おぞましい政治的な駆け引きのなかで、青年マックスの実直な性格描写がひととき目立つ。翌日、マックスは、イローとテルツキの謀略を見破りながらも署名した父から、ヴァレンシュタインにかけられている謀反の容疑を知らされる。しかし、マックスはヴァレンシュタインの裏切りを信じない。逆に彼はヴァレンシュタインの失脚を企図する父の密かな策謀に腹を立てる。マックスは言う。

「公爵様を何という狂人にしてしまうことでしょう。彼だって、そんなことは考えられないでしょう。三万の選り抜かれた部隊、誠実な軍人たちに、誓言と義務と名誉を忘れさせ、無法な振る舞いへと彼らを団結させるのですか。彼らのなかには千人以上の貴族もおります」。(2部。5幕1場。NA 8,158)

「他の者と違い、あのようなご気性の方の心は掴めません。彼が運命を星に結び付けておられるように、彼は不思議で、神秘的で、永久に理解しがたい道を歩いておられ、星のようです。疑いもなく、世間は彼を誤解しております。いずれ全てのことが解決されるでしょう。この暗い嫌疑から、純粋なあの方が輝かしく歩みだされるのを見ることになるでしょう」。(2部。5幕1場。NA 8,167)

マックスはヴァレンシュタインを擁護するにあたり、彼の誠実な人柄、義務と名誉を重んじる高貴な心を説き、さらにヴァレンシュタインが占星術に通じていることを告げる。マックスは、ヴァレンシュタインが占星術、つまりマックスの考えによれば、神秘的な力を持つ超自然的なものの啓示に基づいて行動していることを明かし、ヴァレンシュタインにかけられている謀反の容疑を否定する。ヴァレンシュタインと占星術の関わりについては、既に第一部『ヴァレンシュタインの陣営』で、「皆が言っているが、彼は星を見て、近くや遠くの将来のことを読み取るそうだ……」(1部。6場。NA 8,24)と、兵士たちの会話のなかで話されている。そして第二部『ピッコローミニ父子』ではヴァレンシュタインの娘テークラが城のなかにある秘密の部屋について説明する。その部屋のなかで星占いが行われるのだった。

「私がさんさんと降り注ぐ日の光のなかから素早くその部屋のなかに入ったとき、私は不思議な気がしました。なぜならば、薄暗い夜が私を突然に囲んだからです、奇妙な照明に弱々しく照らされて。……しかし一人の美しい女性がマルスの傍らに立っていて、星が彼女の頭上で優しく輝いていました。それがヴィーナス、喜びの星です。左手にマーキュリーが翼をつけて現れ、真なかに王者のように威厳に満ちた一人の快活な男が銀白色に輝いておりました。それがジュピターです。父の星です。そして月と太陽がその傍らにおりました」。 (2部。3幕4場。NA 8,123f.)

次第に、ヴァレンシュタインと占星術の関わりが舞台の前面に出てくる。シラーは占星術を持ち出すことによって、ヴァレンシュタインが陥る破滅が彼の性格的な弱点に起因だけでなく、得体の知れない魔的な力によるという印象を、私たちの心に植え付けてゆく。しかも、シラーはヴァレンシュタインの口を借りて、人間の生を左右するかに見える運命なるものの力に対して、適切に対処すること、つまり未知なる力を読み取る洞察力の涵養が必要なことについて説く。つまるところ、シラーはヴァレンシュタインに運命なるものの力を認識する眼識を備えさせている。

腹心イローは「時がするりと逃れ去る前に、決起すべき時というものにお気づきください」(2部。2幕6場。NA 8,97)と、ヴァレンシュタインに決断を迫る。しかしヴァレンシュタインは言う。

「人間の行為も宿命によって種を蒔かれているのだ。未来の暗い国土に撒き散らされて、希望を抱きながら、運命の力に委ねながら。種の蒔きどきを告げるために、正しい星の時間を読み取ることが必要だ」。 (2部。2幕6場。NA 8, 99)

ヴァレンシュタインは無自覚的に運命に我が身を委ねるのではなく、「種の蒔きどき」、行動の開始時を的確に読み取る眼識の涵養が必要なことについて説く。しかし、「正しい星の時間を読み取ることが必要だ」と説くヴァレンシュタインが、相変わらず躊躇を繰り返し、まさに千載一遇の機会を逸してしまう。しかも、ヴァレンシュタインは、イローが運命について微妙な発言をしていることに、気付かない。イローはヴァレンシュタインの前記の発言の前に、次のように述べていた。

「あなた様は、この世の時が逃げ去るまで、星が示す時をお待ちになるのですか。私の言うことを信じてください、あなた様の胸のなかに、あなた様の運命の星があるのです。ご自身をお信じください。あなた様のヴィーナスは決意を固めたのです。あなた様に害をなす唯一のもの、禍星は疑念を抱くということなのです」。(2部。2幕6場。NA 8,98)

確かに、イローの指摘は当たっている。ヴァレンシュタインに躊躇を繰り返させる原因は、彼自身の能力に対する疑念なのだ。彼は存在の根幹のところで、自分自身を信じられなくなっている。しかも、ヴァレンシュタインは、彼の家族に加えて、彼を敬愛する多数の兵士たちの生活を守らなければならない。それ故、彼は皇帝側から迫られている軍隊の解散を何としても防がなければならない。しかもできることなら、皇帝側も己の軍隊も戦うことがないことを、彼は願っている。そこには、将軍として、統率者として、己の力を信じきれなくなったにもかかわらず、依然としてその地位に留まり様々に差配しなければならない支配者の苦悩が窺える。現実主義者として造形されたヴァレンシュタインが、現実的な危機の状況にあって逡巡を繰り返し、現実的な対策を採らずに、怪しげな占星術に頼る根拠については、次の第三部で明らかにされる。

(5) 『ヴァレンシュタインの死』について

こうして、ヴァレンシュタインと占星術の関わりは、ヴァレンシュタインの人物像に神秘性を付与することになる。第三部は星占いに携わるヴァレンシュタインと占星術師ゼーニーが醸し出す不可思議な世界の描出によって始められる。第三部の導入部で、占星術師ゼーニーがヴァレンシュタインに「どうもヴィーナスが気になります、閣下。丁度、昇るところです。太陽のようにヴィーナスが東方で輝いておりますぞ」（3部。1幕1場。NA 8,177）、と好機到来を告げる。そしてヴァレンシュタインもゼーニーの占いの結果を信じて言う。

「もはや考えているときではない。あの輝かしいジュピターが統括し闇に準備された仕事を、光明の国に無理にも引き入れるのだ。幸運がわしの頭上を通り過ぎる前に、今、急いで行動が起こさなければならない。天空では絶えず移動があるからな」。（3部。1幕1場。NA 8,178）

しかしこの言葉とは裏腹に、それでも、ヴァレンシュタインは行動を起こさない。彼は、部下ゼージンが皇帝派によって捕らえられたことを知り、計画の実行を早めるどころか、休止する。ゼージンはスウェーデン軍との連絡に赴いていたのだった。占星術はヴァレンシュタインに幸運を予言し、現実世界は彼を苦境に立たせる。このことは、占星術を信じて人生を歩んできたヴァレンシュタインに対して、運命的なものの力によって突きつけられたアイロニーを意味する。しかもヴァレンシュタインのような国家的な人物の生き様を左右する力となれば、それはもはや人類の歴史を差配する途轍もなく大きな力と言えよう。シラーがこれまでに創作した戯曲に登場する人物で、ヴァレンシュタインほどに国家的な命運、まさに自国のみならず他国の安寧にも影響を及ぼしうる軍事的・政治的な力を備えた人物

が取り扱われたことはなかった。シラーは1789年にイエナ大学の歴史学教授に就任し歴史の研究に携わることになったが、歴史学の研究を通じて国家どころか、人類の歴史さえも差配する大きな力の存在に関心を向けざるを得なくなった。その人類の歴史を支配する大きな力は、占星術を利用して妄想の像をヴァレンシュタインの心に植え付けることによって、彼を人生の成功者に仕立て上げてきた。つまり、ヴァレンシュタインはこれまで歴史的な力の合力を得て、高級軍人として功を立ててきたが、ここにきて、その歴史的な力は彼に人生の浮沈にかかわる、それどころか生命にかかわる試金石を今一度準備したのだった。この試金石にどのように対処するかは、個人の意志が決定する。しかし、命を賭して進めてきた計画にもかかわらず、ヴァレンシュタインが選択した道はまたしても計画の実行を延期することだった。しかも、ヴァレンシュタインは強いられて行動しなければならないことに嫌悪感を示す。

「どうしてできるのだろうか。わしはもはや好きなようにはできないのか。現在の好きなままの生き方に戻れないのか。わしは考えたからには、誘惑を斥けなかったからには、その行為をやり遂げなければならないのだろうか。—— 夢で心を養い、不確かな成功に至る手立てを考えずに、進む道だけを開けておいたからとて ——」。(3部。1幕4場。NA 8,183)

さらにヴァレンシュタインの独白が続く。

「わしの胸のなかでは、わしの行為はまだわしのものだ。一旦、心の安全な隅から、母親の懐から解き放たれると、つまり見知らぬ生のなかに投げ出されると、わしの行為は、如何なる人間の技量も信じないあの狡猾な力のものなのだが」。(3部。1幕4場。NA 8,184)

ヴァレンシュタインはこの期に及んで、なお躊躇する。しかも、まるで彼は人間の身では如何ともしがたい途方もない力から我を守るかのよう
に、己の心のなかに閉じこもろうとする。彼は彼の心のなかにも魔の手が
忍び寄ることを知らないのだろうか。そうだとするならば、彼は運命的な
ものの力を見くびっていることになる。ヴァレンシュタインは同盟の相手
スウェーデン軍に伝えなければならない返事を遅らせ、皇帝に対する裏切
りを避ける可能性について模索する。歴戦の勇者に相応しからぬ、しかも
皇帝に次ぐ要職を担うといっても過言でない立場にいるヴァレンシュタイ
ンだが、彼の政治的な感覚が麻痺しているかのようだ。

躊躇の挙句、ヴァレンシュタインはマックスに謀反の計画を打ち明ける。
「わしは皇帝への奉公をやめた」（3部。2幕2場。NA 8,204）、あるいは
「宮廷はわしを没落させる決議をした。だからわしは先回りをするつもり
だ。わしらはスウェーデン軍と同盟するだろう。あれは頼もしい人々、良
い味方だ」（3部。2幕2場。NA 8,205）といった言葉が、ヴァレンシュ
タインの口から漏らされる。一方、これまでヴァレンシュタインを人生の
師として崇拜し、彼の生き方に倣ってきたマックスではあったが、彼はヴ
ァレンシュタインの謀反の意志を知るや、諫止する。ヴァレンシュタイン
の生き方に異議を唱えることは、マックスにとっては、彼の自我の芽生え
の表出を意味する。マックスは言う。

「閣下、あなた様は私を今日は一人前になされます。なぜなら、今日ま
で私には自分の道と方向を見つけることが免除されておりました。私は無
条件であなた様に従ってきました。あなた様だけを見ていればよかったの
です。そうすれば正しい道を間違えませんでした。今日初めてあなた様は
私を私自身に戻してくださいました。あなた様はあなた様と私の心の間で
選択することを、私に強いておられます」。（3部。2幕2場。NA 8,205）

さらにマックスの諫止の言葉は続く。

「おお、そんなことをなさないでください。お止めください。あなた様の清らかな高貴なお顔立ちは、まだこの不幸な行為について何も知りません。あなた様の空想だけがその行為を汚しているのです。あなた様の支配者らしいお姿から、公明正大なものは追い出せません。それ、その黒い汚点、その敵を放り出してください。それはどんな手堅い徳にでも警告しようとする単なる悪夢だったのです。人間にはそういう瞬間もありましょう。しかし、最後には幸福な感情が勝ちを収めなければなりません」。 (3部。2幕2場。NA 8,206)

マックスは感情が駆り立てるままにヴァレンシュタインを非難するのではない。人間の心に忍び寄る悪魔的なものが人間の行く末を決めてしまうこともある、と人生経験の浅いマックスが知っているのだ。歴戦の勇者、しかも単なる軍人ではなく、政治的な手腕も発揮して栄達を極めている男も、正義感に燃え、純粋な心から発する若者の戒めの言葉を前にすると、旗色が極めて悪い。豊富な人生経験はそれなりに貴重なものだが、それにもまして他者を思い遣るマックスの心が、私たちの心を打つ。

しかも、マックスの心を煩わせるのはヴァレンシュタインだけでない。ヴァレンシュタインの打倒を決意した父オクタヴィオも、マックスに賛同と助力を求める。オクタヴィオは息子マックスに、ヴァレンシュタインの解任が避けられないことを、そして家名の誉れのためにも皇帝に忠義をつくさなければならないことを諭す。しかし、マックスはオクタヴィオの下心を見抜いている。『ヴァレンシュタインの死』の第二幕第七場で描かれる両者の決別の場面は、特に私たちの心に迫る。

マックス：

「なぜそんなにこっそりと陰に回って姦計を巡らし、辺りをうかがいながら、泥棒や泥棒の手引きと同様に忍び歩くのですか。不幸な裏切りです。あらゆる悪の根源です。……父上。私はあなたを許せない。許せません。公爵様は私をひどく騙しました。しかしあなたはそのことに比べてそれ程良いことをしたわけでもありません」。

オクタヴィオ：

「ああ、わが息子よ。おまえの心を痛めたことを許してくれ」。

マックス。立ち上がり、疑惑の目で彼を見る。：

「そんなことがあるのでしょうか。父上、父上、あなたは予め図って事をここまで運ぼうとなされたのですか。あなたはあの方の没落によって出世なされるつもりですか。オクタヴィオ殿、それは同意できません」。(3部。2幕7場。NA 8,226f.)

オクタヴィオに対するマックスの呼びかけが、「父上」から「オクタヴィオ殿」に変わる。親子関係に決定的な亀裂が入ったことを、シラーは呼称によっても示す。必死になってマックスを説き伏せようとするオクタヴィオには、人生経験から得た処世訓に基づき、権力に反抗する不利を諭し、自らと息子の破滅を防ごうとする父親の姿が窺え、オクタヴィオに反抗するマックスには、行動の結果などは念頭になく、ただただ正義感に燃える若者の姿がある。

さて、これまで幾度も繰り返されるヴァレンシュタインの躊躇、しかもこの第三部にいたってはこの躊躇が彼の破滅を避けられないものになっているが、E.シュタイガーはこの躊躇をヴァレンシュタインの生来の性格に単

純には帰することができない理由を探る、「ヴァレンシュタインは躊躇する、なぜならば彼は良心を失ってしまった犯罪者ではないからだ、そして彼は計画していることに信頼を置いていないからだ。彼が信じないのは、自分の不正を感じているからであり、そしてそもそも久しい以前から密かな疑念に苦しんでいるからだ。この独特な転換の時期は厳密に確定される²⁴⁾」と。そしてE.シュタイガーは、ヴァレンシュタインの性格に負の転換がもたらされたと判定する根拠として、ヴァレンシュタインの妻の発言を挙げる。

「あの頃、彼はまだ嬉々として努力を続ける人でした。彼の名誉心は穏やかに暖める火のようでした。まだ、荒々しく焼き尽くす灼熱の炎ではありませんでした。皇帝は彼を愛し、信頼しておられました。彼が始めたことは、必ず成功しました。しかしレーゲンスブルクでの不幸な日以来、あの日が彼を高みから落としたのでしたが、不安そうに、人と打ち解けようとしないう心が、疑い深く、陰鬱に、彼を襲ったのでした。……」（3部。3幕3場。NA 8,236）

さらに公爵夫人は「彼から静かな心が逃げ去り、昔の幸福を、ご自分の力をもはや嬉々として信じることもなく、彼はあの暗い術に、彼の心に向けてしまったのです、それを操る人をまだ誰も幸福にしたことがないあの術に」（3部。3幕3場。NA 8,236）と述べる。軍事や政治といった実践的な世界で抜きん出た功績を挙げてきた、まさに国家的な人物が、突如、国家の中枢から放逐されたのだった。E.シュタイガーの慧眼は、再起不可能にまで精神的に転落したしまった人間の心の奥底を見抜く。E.シュタイガーは「レーゲンスブルクでの無情な解任は、ヴァレンシュタインの心を傷つけただけでなく、己の能力に寄せる信頼をも揺さぶったのだった。奉公と幸運によって、この世の力の最高の段階に定められていた彼には、こ

のような侮辱が彼の身に降りかかったことはなかつただろう²⁵⁾」と指摘する。ヴァレンシュタインは人間としての存在の根幹を傷つけられ、否定された人物の悲劇である。それでも、彼の心のなかには良心が残っている。皇帝に対する反逆を心のなかで描きはするが、良心はそれを実行に移すことを逡巡する、つまり許さないのだ。もはや、過激とも言いうるほどの熱い炎を燃やして、社会変革を掲げた若い頃のシラーではなかつた。シラーはヴァレンシュタインに武人らしく華々しく散る生き方よりも、もっと過酷な生の道を課すのだった。

さて、ヴァレンシュタインは破滅の危険が迫っていることを悟り、スウェーデン軍に助力を要請することを決意する。ところが、ヴァレンシュタインは、事ここに至っても、なおも星占いに頼る。ヴァレンシュタインの意を汲んで、ゼーニーが星占いをするが、その結果はヴァレンシュタインの没落を予言する。

「スウェーデン軍の到着を待たないでください。禍があなた様に迫っております。その兆候が恐ろしそうに近づいております。破壊の網があなた様を囲みます」。(3部。5幕5場。NA 8,340)

一方、皇帝派と通じている司令官ゴルドンがヴァレンシュタインに降伏を勧める。ヴァレンシュタインは情勢の不利な展開を認識する。しかも、ヴァレンシュタインは、「わしは誰のことも強制しない。幸福がわしから逃げてゆくと思うなら、わしのもとを去るがよい」(3部。5幕5場。NA 8,343)と、部下たちに度量の広いところを見せる。続けて彼は言う。

「長く眠ろうと思う。どいうのも、この数日の苦悩は大きかったからだ。わしを早く起こさないように取り計らえ」。(3部。5幕5場。NA 8,343)

ほどなく、「あのなかで、公爵様が殺害されて横たわっておられます」(3部。5幕10場。NA 8,349)と絶叫するゼーニーによって、ヴァレンシュタインの死が伝えられる。駆けつけたオクタヴィオにブットラーが殺害を認める。かつては兵士たちから羨望の眼差しと畏怖の念で見られ、皇帝にさえ一目置かれ、そして純粹で気骨ある青年マックスに尊敬されたヴァレンシュタインが、あっけなく殺害されたのだった。そしてほとんど同時に、オクタヴィオは自分が皇帝によって公爵の地位に取り立てられたことを知る。そのときの情景をト書きは次のように描写する。

一人の使者が手紙を持ってくる。

ゴルドンが彼を迎える。

「何だ。これは皇帝の印だ」。

彼は宛先を読み、非難の眼差しでオクタヴィオにその手紙を渡す。

「公爵ピッコローミニ様宛だ」。

オクタヴィオは驚き、苦しそうに天を仰ぐ。(3部。5幕12場。NA 8,354)

何故、オクタヴィオは、待ちに待った、公爵への昇格なのに、「苦しそうに天を仰ぐ」のか。B.v.ヴィーゼはオクタヴィオの生き様について次のように解釈する。

「オクタヴィオは皇帝の權威の賢明な代行者として行動する。しかし、彼は決して人格者としては行動しないし、父親としても友人としても行動しない。彼の罵りは程度を心得ており、原則的に容認できる。……オクタヴィオが最後に生き残り、大公に出世し、意味無く生き続けること、ヴァレンシュタインとマックスが死なねばならないことは、正義の原理の繰り返しのために支払わねばならない代価である²⁶⁾」。

また、E.シュタイガーはオクタヴィオの生き様に対してもっと厳しい批判をぶつける。

「今や、オクタヴィオは実際に昇格した。そして彼が望んだ公爵の位を得るために友人を犠牲にしたという嫌疑は、世間の目には確かなものになる。彼が意識するにせよ、意識しないにせよ、汚点は生涯に亘って彼について回る。彼はその際に何も得なかった。反対である。新しい称号は彼に息子を失ったことを思い出させるだけだ。孤独な老いが彼の前には待ち構えている。公爵になったばかりの彼の家は、(後継者がいないため) やがて断絶することになる²⁷⁾」。

シラーはオクタヴィオを現実主義者として造形している。その現実主義者は、オーストリア帝国の臣下としては最高位である公爵に叙せられたのだった。彼が祈願した最高の成果を、彼は手中にした。しかし、現実世界での地位と名誉と引き換えに、彼は後継者である息子マックス、そして朋友であり上司であるヴァレンシュタインを失った。政争が終わってみれば、彼は天涯孤独の身になっていた。

私たちは、天を仰ぐオクタヴィオの姿を、次作『マリーア・ストゥールト』でも目にする。政敵マリーアを処刑台に送り、スコットランドとイングランドの支配権を確実なものにしたエリーザベトに残されたものは何か。国家の良識として国政の精神的な支柱であったシュルーズベリ伯には高齢を理由に引退され、情夫レスター伯も結局は亡きマリーアへの愛を再認識しフランスへ逃れてしまう。エリーザベトには、富と権力だけが残り、人々の心は残らなかった。気づいてみれば、彼女の周りには信頼できる人間が誰もいない。人を政争の道具、専制体制を護持するための道具としか見做さない彼女が、このような状況を招いたのだった。ト書きに「彼女は

感情を押し殺し、気持ちを落ち着けて立ち尽くす」(NA 9,164) とある。

オクタヴィオにせよ、エリーザベトにせよ、現実の世界では勝利者だが、未来の世界での存在を失っている。現実主義的な思考は、現実世界での制限を超え出る表象を惹起できない。それ故、現実主義者の関心は、制限された現実世界での現実的な事象に向かう。明日の幸せ、未来の幸福は現実の向こうの世界のことだから、現実主義者の思考の対象から外れる。現実主義者にとっては、瞬間的な至福の享受が肝要なのである。その至福をオクタヴィオは獲得した。しかし、彼にとって瞬間的な至福は成就できたが、未来へ向けての飛翔の道は存在しない。後継者であるマックスを亡くしてしまったことは、オクタヴィオにとって未来が消失したことを意味する。そして、オクタヴィオが見せた「苦しそうに天を仰ぐ」姿は、現実主義者の生の限界を象徴する。

(6) マックスとテークラ

『群盗』のカール・モーアや、『たくらみと恋』のフェルディナントといった、青年期にシラーが造形した純粹で熱い血に燃える青年像が、マックスに蘇える。確かに、『ヴァレンシュタイン』の後に創作される戯曲でも、世事に疎くとも一途な性格の青年が描かれる。『マリーア・ストゥーアルト』ではスコットランド女王マリーアに一方的に想いを寄せる青年貴族モーティマーがいる。彼は、軟禁状態のマリーアを救出するために奔走するが、老獪な手合いが暗躍する宮廷社会ではとても太刀打ちできずに、マリーア救出計画が失敗に終わった後に、あえなく自害して果てる。また『メッシーナの花嫁』*Die Braut von Messina* (1803年) では一人の女性ベアトリーチェの愛をめぐって兄ドン・マーヌエルと弟ドン・ツェーザルが争い、遂には兄が弟の刃に倒れる。しかも、その女性は彼らの実の妹であることが後に判明するという近親相姦的な愛がモチーフになっている。ドン・マーヌエルにせよ、モーテ

イマーにせよ、愛する女性に一途な愛を捧げる。しかし、マックスに比べると、この二人の存在はどこか影が薄い。マックスは肉親である父との絶縁に踏み切ったまで、尊敬するヴァレンシュタインのために命を賭ける決心を固め、しかも公的な立場から見れば、いわば罪人であるヴァレンシュタインの娘テークラとの恋愛に生きる。一方、モーティマーにいたっては、彼が思いを寄せる女王マリーアは彼を政争の道具としてしか見ておらず、日本的な表現をするならば、彼は独り相撲を取っているに過ぎず、夢見る青年の恋の先走りで行き止まりになる。またドン・マヌエルは確かに愛する女性に誠を尽くすが、この女性との恋愛がそもそも彼の一族にかけられた呪われた運命のなせる業であり、彼がその呪われた宿命に立ち向かうことを決意するに至ることはない。ところが、マックスは、恋愛においてのみならず、生そのものの道程においても強い意志をもって、破滅を恐れずに己の信念に従って生きる青年である。ただし、彼は理想家肌の青年で、時には現実そのものへ向けるべき視線を欠いて、己の理想に沿って虚像を作り上げてゆく傾向も窺える。そもそも、マックスは父オクタヴィオの忠告にもかかわらず、ヴァレンシュタインの謀反の計画をなかなか信じようとしないし、また迫り来る禍の原因を敵方の非道な仕打ちにのみ見ている。

「おお、この国家の手管、私はそれをどんなに呪うことか！ おまえたちは姦計を用いてヴァレンシュタインをさらにもう一步駆り立てるだろう。おまえたちはそれをすることができるだろう。なぜならば、おまえたちは罪ある状態のなかにおいて、さらに罪を犯そうとしているからだ」。(2部。5幕3場。NA 8, 171)

しかし、現実の世界から離れ、夢に浸ることもあるマックスだが、彼の純粹で熱い心は私たちの心に心地よい感動を惹起する。マックスの魅力

は、何よりも彼が美しく夢を描くことができることにある。猛々しい兵士たちについてさえ、人間的な心を取り戻し、町の人々と暮らし始めることをマックスは信じていたことが、思い出される。

「おお、美しい日よ！ 遂に兵士が生活に戻るときには、人間的な心に戻るときには、嬉々として行進する兵士の列に旗が翻り、優しい兵士の行進は故郷へ急ぐ。……歓声を上げる民衆は、われ先へと兵士の行進を妨げるほどに、村々から、町々から喜びの涙を流しながら溢れ出る」。(2部。1幕4場。NA 8,79f.)

まして、テークラとの幸福な未来について、マックスは幾度思い描くとか。

実は、マックス以上に私たちの心を惹きつける人物がいる。それはマックスの恋人テークラだ。彼女は理想主義的な面と現実主義的な面を持ち合わせている。彼女と同様に、確かに、ヴァレンシュタインにも理想主義的な面と現実主義的な面が窺える。しかしヴァレンシュタインは理想の世界と現実の世界を徘徊するだけで、事に当たって自らの意志に従って決定しようとはせず、星占いに頼る。ところが、テークラはマックスに一途な愛を寄せるが、愛の情念に溺れることなく、ヴァレンシュタインと皇帝派との抗争に起因する緊迫した状況のなかで、理智的な現状認識に基づいて判断を下す。彼女は愛の世界においても、現実の生活においても、自己を喪失するような過度の緊張に捕縛されることなく、また政治的な姦策等の低俗な術策を弄することもなく、自己自身の生の信念に基づいて真の生を育む。愛の陶醉に溺れることなく、的確な現状認識に基づき、愛する者との心の浄化を図る女性に、シラーの戯曲で以前に出会ったことが想起される。『ドン・カルロス』でカルロスが思慕の情を寄せた義母エリーザベトがそのような女性だった。しかし、

残念ながらエリーザベトは、カルロスの心を至福な未来社会の構築へ向けるためとはいえ、自由主義者ポーザ公と図って策を弄したことがある。そのために、美の象徴ともいべき清らかな輝きを放っていたエリーザベトの品格を傷つけることになった。ところが、テークラは、政治的なハンドリングが展開するなかで、政治的な事件の経過に的確な眼識を示しながらも、マックスに寄せる清純な心を保ち続ける。そのテークラは、実は、マックスとの愛で自己の存在の価値に目覚めたのだった。

テークラ：

「心の動きは運命の声です。私はマックスのものです。私が今生きているこの新しい生は、彼の贈り物に他ならないのです。彼は彼の創造物に権利を持っております。彼の美しい愛が私に魂を吹き込む以前は、私は何だったのでしょうか。私は私自身について私の愛する人が考えるより小さく考えたくありません。大したものを持っていない者といえども、取るに足らないままでいることはできません。私は私の幸福で力が与えられたように感じます。人生が硬い心の前に厳に横たわっています。私が自分のものだというのを、今知りました。固い意志、私の胸のなかにある強要することのできない意志と知り合いになりました。そして最高のものには、私は全てを賭けます」。(2部。3幕8場。NA 8,133)

理想の愛を我が物としたと信じるテークラには、愛に起因する葛藤はない。彼女に窺えるのは、まさに捨て身の愛である。私欲に毒された、政治的な欲望に支配されて作り出された社会とそこに住み着いて離れようとする者に対して、自己を滅した愛が判定をくだす。テークラは愛という理想の世界に飛翔しながら、同時に現実世界をその鋭い眼力で見抜いている。彼女はマックスに向かって言う、「ここでは、私以外の誰も信じてはいけ

ません。私は直ぐに分りました。あの人たちは目的があるのです」(2部。3幕5場。NA 8,126)、あるいは「どうか私を信じてください。あの人たちは本気になって、私たちを幸せにし、私たちを結び付けようとしているのではありません」(2部。3幕5場。NA 8,126)と。彼女は、愛の力によって彼女自身の自我を目覚めさせてくれたマックスより優位に立つ。理想主義的な観念の世界に飛び込みがちなマックスに、テークラは現実の世界を冷静に洞察することを求め。テークラは、主観的な人間が他者の心のなかに入ってゆけず、真の意味で他者を諫止できないこと、また、自己の決意を実行に移せない者が、逆に他者の関心に引き込まれることを説く。テークラのこの諫言は、マックスにだけでなく、彼女の親しい者たち、特に父ヴァレンシュタインにも向けられている。

しかし、マックスとテークラの愛はヴァレンシュタインの関心事でない。既に考察を加えたように、ヴァレンシュタインが娘の幸福を願っていることは確かだが、彼は政略結婚という政治的な手管をテークラの結婚においても用いようとしている。個人の愛が政治的な駆け引きの手段に用いられようとしている。もっともテークラは、個人の心を手段としてしか見做さないうちは、政治的な世界という、いわば公的な世界と、個人の恋愛という私的な世界のあいだで仲介の可能性がないことを、認識している。マックスが公的な世界と私的な世界の共存の可能性を信じ、その招来をヴァレンシュタインに託しているのに反して、テークラは政治家としてのヴァレンシュタインの心を見抜き、的確な現状認識に基づき、私的な世界での幸福を守ろうとする。「おお、われわれもいつか幸福になろう」(2部。3幕5場。NA 8,127)と、未来世界での二人の愛のさらなる幸福を願うマックスと、「実際に、私たちはそうでないのですか。あなたは私のものではないのですか。私はあなたのものではないのですか」(2部。3幕5場。NA 8,128)と、二人の心の世界で愛を育んでいこうとするテークラの姿に、生

に対する両者の本質的な相違が窺える。一方には、理想主義者マックスがおり、他方には、理想の世界で愛の炎を燃やしつつ、欲望が絡み合う現状を冷静に把握する現実主義者テークラがいる。しかし、テークラは死を決意したマックスをこの世に、現在の愛の幸福に結び付けることができない。後には悲嘆にくれるテークラの歌声だけが悲しく響く。

「櫛の森はざわめき、雲が流れる。乙女は岸辺の緑のなかをさすらう。波が騒ぐ、強く、強く。彼女は歌う、暗い夜へ向けて。涙で目を曇らせて。心は死んでしまった、この世は虚しい。この世は希望に何も与えぬ。汝、聖なるものよ、汝の子を呼び戻せ。私はこの世の幸を享受してきた。私は生き、愛してきた」。(2部。3幕7場。NA 8,130)

信義に基づく人間的な世界での生を追い求めるマックスにとって、行動の二者択一、つまり皇帝に立てた臣従の宣誓と、ヴァレンシュタインに寄せる尊敬のうち一方を選ぶことはできない。しかも、この選択は生と死の別れ目にもなる。彼が現実世界での生に留まりたいならば、彼は己の心に沈黙を命じ、ヴァレンシュタインから離反しなければならない。それどころか、そのような仕儀に至ることは、マックスにとってヴァレンシュタインを裏切ることになるのみならず、己が己を裏切ることになる。皇帝に味方すれば、マックスは己の心に死を宣告することになり、ヴァレンシュタインを選択すれば、皇帝軍から命を狙われることになる。いずれにせよ、マックスには、死によって自己同一性を保つという選択が残っているだけだ。それ故、『ヴァレンシュタインの死』第三幕第二十一場で、マックスは、「私は、皇帝に立てた誓いを破り、義務を放棄しなければならないのだろうか。オクタヴィオの陣営に、父親殺しの弾丸を送らなければならないのだろうか」(NA 8,279) と、皇帝と父オクタヴィオに刃を向ける苦し

みと、「侯爵様が以前から私にしてくれたことを考えてください」(NA 8,279) と、ヴァレンシュタインに寄せる敬愛の念との狭間で苦悩し、テークラに採るべき道を尋ねるが、彼女には、マックスにとって二様の生き方が不可能なことを分かっている。つまり、マックスには死の選択しか残されていないのだ。

テークラ：

「この感じやすい心が最初に擱まず、見出さなかったものが、どうして正義でありえるのでしょうか。行ってください、あなたの義務を果たしてください。あなたをいつも愛しております。たとえ、あなたが何を選ばれようと、あなたは常に高貴で、あなたに相応しく行動なさったのです。——しかし後悔があなたの心の美しい平和を乱すことがあってはなりません」。

マックス：

「そうですと、私はあなたのもとを去らなければなりません、あなたから別れなければなりません」。

テークラ：

「あなたがあなた自身に忠実であるならば、それは私に対しても忠実だということです。運命が私たちを別れさせようと、私たちの心は一つのままです」。

(3部。3幕21場。NA 8,280)

マックスは彼を慕う部下を引き連れ、皇帝軍として、スウェーデン軍へ突入して斃れる。しかし、マックスが戦死する状況そのものが描出されることはなく、彼の死はまず戦場から流れた噂として、次に味方の将軍から

の戦勝報告として、ヴァレンシュタインに伝えられる。

まず、ヴァレンシュタインの義弟テルツキ伯爵から。

「ある農夫がテイルシェンライトから報告をもたらしました。日没前に始まったそうです。タッシュャオから来た皇帝軍の一部隊がスウェーデン軍の陣地に突入し、戦闘は二時間続き、千人の皇帝軍が斃れました、その連隊長とともに。それ以上は分かりません」。(3部。4幕4場。NA 8,293)

次にヴァレンシュタインの腹心イロー将軍から。

「ライン伯爵から報告が来ました。そして彼がもたらしたことは、私が先程あなた様にお伝えしたことです。スウェーデン軍がここから五マイルのところにおります。ノイシュタットのそばで、あのピッコローミニが騎兵とともにスウェーデン軍を襲撃しました。恐ろしい殺し合いが行われました。しかし遂に数が勝ちを収めました。パッペンハイマー連隊は全て、部隊を率いていたマックスとともに —— 戦場に斃れたとのことです」。(3部。4幕5場。NA 8,294)

スウェーデン軍と同盟して皇帝軍に対峙していたヴァレンシュタインにとって、スウェーデン軍の勝利、皇帝軍の敗北は朗報だ。しかし、皇帝軍の指揮官マックスの死は、ヴァレンシュタインにとっても、テークラにとっても、悲報を意味する。テークラはマックスの死を知ったとき、悲嘆にくれながらもマックスの死を「地上における美しい者の運命」(3部。4幕12場。NA 8,318)として自らを納得させる。マックスは人間的な心について多くの美しい言葉を伝え、自他の心の浄化を願った。しかしマックスのような心美しき理想主義者は、この地上には住めなかったのだ。地上の実践的な至福を享受する私たちは、マックスのような心清らかな者が死へ赴くのを、見ているだけなのだろうか。マックスの死は、何故か私たちに

生に対する寂しい気持ちをも惹起する。

しかもマックスの死にテークラの死が続く。テークラの死も、直接に描写されることはない。彼女の死は、恋人の墓に、恋人の棺のあるところに行きたいという彼女の言葉によって暗示される。マックスの死を聞いて動揺するテークラを気遣う女官ノイブルンに、テークラは言う。

テークラ：

「何処へ行くのかですって。世界には一つの場所しかありません。彼が埋葬されているところです、彼の棺のあるところへ行きます」。(3部。4幕11場。NA 8,314)

テークラ：

「私は、もはや生きていない人を求めています。あの腕のなかに行きたい—— 神様。私はただただ愛する人の墓のなかに行きたいのです」。(3部。4幕11場。NA 8,314)

現世では、死は永遠の別れになる。ただし、シラーはテークラが述べる希望「私はただただ愛する人の墓のなかに行きたい」(NA 8,314)という台詞から窺えるように、自由な決意による死によって、永続的な愛の心を描き出す。N.エラーズは、テークラに窺える理想主義的な面と現実主義的な面を指摘した上で、「さらに彼女はあらゆる過度の緊張や、あらゆる低俗性から自由である。道徳的に完全無欠である彼女は、自由な決意から死に赴き、そしてそれと共に荒廃している現実に対峙することによって、シラーが美学論文のなかで話したあの崇高な偉大さのうちに現れる²⁸⁾」、とテークラの生き様を高く評価する。しかし、テークラの生きる世界はマックスとの愛の世界だけなのだろうか。確かに、『ヴァレンシュタイン』に

おけるマックスとテークラの愛の顛末は、陰鬱な政治的なハンドリングが展開するなかで、唯一の人間性溢れる、私たちの感涙を誘うエピソードだ。H.フルマンは「マックスとテークラ、真剣に考え、伯爵夫人と違って、悩むだけでなくて行動しながら、背信の機械に巻き込まれまいとする唯一の二人の人物が、大きな政治の世界で、権力闘争と姦計の痛ましい犠牲者になることは、悲劇中の悲劇である²⁹⁾」と指摘する。またE.シュタイガーは作劇術の観点からも考察を加えて次のように述べる。

「私たちはほっと息をつく。そして私たちは、既にほとんど忘れられた、既に可能性としてほとんど消え去った幸福、つまりマックス・ピッコローミニの高揚した感情とテークラの深く内面的な真面目さに身を委ねる。このテークラの実剣さには、若い主人公の輝かしい出現におけるよりも、はるかに気高く完成した人間性が窺える。こうなると私たちはますます不安げに、もはや押し留めることができない事件の今後の展開を見つめる³⁰⁾」。

しかし「純粋な愛の心を育む私的な世界」は終始孤立したままでもあった。「愛は真なる世界を打ち立てる限り、非依存的なものであり、……そして真なることによって、魔法の領域を愛する二人の周りに結ぶ。その魔法の領域はあらゆる他の邪悪な衝動から二人を孤島に追いやるように分離する。愛し合う二人は彼ら自身の心だけを信頼し、他の人間を信頼することはない³¹⁾」と指摘するB.v.ヴィーゼの言葉を、今一度噛み締めることが肝要ではあるまいか。もちろん、B.v.ヴィーゼはこの二人の愛の道程を、「マックスとテークラの世界はあらゆる歴史の彼岸で、歴史を超えて生きる愛であり、その愛は彼らの純粋に道徳的な存在のなかで彼らの方法でファンタスティックに、あらゆる現実的なものに対峙している³²⁾」と、讃えることにやぶさかでないが。

(7) むすびに

この三部作において、ヴァレンシュタインの登場は第二部第二幕まで待たなければならない。第一部『ヴァレンシュタインの陣営』では、ヴァレンシュタインの実際の登場はなく、兵士たちの噂話によって彼の人物像が描かれる。しかも、兵士たちの話の大半は彼のことに終始している。つまり、実際の登場はなくとも、ヴァレンシュタインが兵士たちの言葉を通じて存在していることになる。将来の生活どころか、明日の安全さえも気にせず、瞬間の幸せの感情に浸って生を謳歌する荒くれ男たちの生き様と、彼らが話題に上らせる大元帥ヴァレンシュタインの人物像との対比が面白くもある。時にはゲーテの言葉を引用しながら、既に先行研究が指摘するように、この第一部は確かにLustspielといえよう。この陣営の場に登場するのは兵士だけでない。農夫とその子、兵士との間に儲けた子供を抱えた酒場の女、カプチーン派の貧乏な僧など、社会の下層部で生きる人間たちのオンパレードが見られる。シラーが演劇に求めている現実社会のある面の縮図が確かに見られる。また、無教養な登場人物たちの直情的な心の吐露、それらの言葉は確かに乱暴で、教養の片鱗も感じられないが、私たちの笑いを誘う。一篇の喜劇も書き上げなかったとはいえ、シラーの喜劇作家としての素質の片鱗を見る思いがする³³⁾。

第二部第二幕でヴァレンシュタインが登場した後は、主として彼を中心にハンドリングが展開する。そして、彼の周りに、ピッコローミニ父子や、ヴァレンシュタインの妻と娘、上級将校たちが位置を占めている。ヴァレンシュタインは軍事的にも政治的にも重責を担う人物に相応しく多くのことを知っているようでありながら、策謀渦巻く宮廷社会を泳ぎ渡ってきた割には、あまりにも物事の裏側、世事に疎く、特に他者の心底を見抜く眼力に乏しい。彼は占星術に熱中しているが、それでいて星の予言を信じることができずに、絶えず動揺を続け、平和を望みながら、安寧を我がも

のにするための行動を起こせずにいる。ヴァレンシュタインの優柔不断な姿勢が目立つ筋の展開を迎え、性格劇を思わせるかのようだが、時折、ヴァレンシュタインが何か底知れない不気味な力によって引きずられているような、運命劇的な要素が垣間見られもする。

ヴァレンシュタインは、シラーが青年期の戯曲に登場させる一連の崇高な犯罪者とは異なる。なぜならば、彼を襲う身の破滅は、彼の行動の罪が招くものではなくて、彼を囲む状況が彼を破滅の渦のなかに巻き込むからである。そもそも、ヴァレンシュタインが軍人として、政治家として力を得すぎたことが、彼が危険人物と見做される根拠であった。国家の護持のため、国家の安寧のために国家に忠勤を励んできたことが、彼が軍事的・政治的な活動の表舞台から放逐されかかる原因になるという、理不尽な状況がある。確かに、皇帝から離反することを考えることによって、彼は犯罪を行うすれすれのところにいるが、彼が実際に反乱行動を起こすことはない。彼は謀反を心に思い浮かべただけだった。彼を担ぎ出して栄達を目論む彼の取り巻き連中、上級将校たちが、皇帝軍と決戦するために、スウェーデン軍との同盟締結を画策するのであって、それでもヴァレンシュタインは最後まで、実際的な行動に走ることを躊躇する。彼の存在を外部から脅かす危険に対して、彼が主体的で道徳的な力を示すことはない。ヴァレンシュタインが崇高であるためには、物理的な圧力に勝る道徳性の勝利が必要だが、ヴァレンシュタインは最後まで行動に移ることはない。

H.フルマンがケルナー宛のシラー書簡の文面を引き合いに出しながら「陣営が〈Lustspiel〉として構成されており、これに対してピッコローミニ父子が〈Schauspiel〉として、ヴァレンシュタインの死が〈Tragödie〉と見做されるなら、三部作は戯曲の基本的な形式全てを一つに纏めている、とシラー自身は断言している³⁴⁾」と指摘するように、またP.A.アルトが「戯曲の三つの部分は物語の異なる局面を映し出しているだけでなく、悲劇の

総合的な構成内でそれぞれに課せられた機能を果たしている³⁵⁾」と解釈するように、『ヴァレンシュタイン』三部作は、それぞれが戯曲の形式を変え、またスポットの当て何処を違えながらも、有機的に結合してヴァレンシュタインの悲劇へと収束しており、様々な人間の様々な生き様を描出している総合的な戯曲の名に相応しい。特に、ヴァレンシュタインの直接的な破滅に繋がる彼の優柔不断な姿勢が、彼の存在の根幹に関わるものの喪失、つまり高級軍人として、それどころか人間としての生の続行を断念、あるいは逃避しなければならないほどに決定的に誇りや自信を喪失し、行動への意欲を惹起する心の自由さえなくしていることに由来することを知った今、彼が度々示す実践的な行動に対する躊躇を単に非難することはできない。ヴァレンシュタインは生に寄せる意欲や自信を失ってしまっているが、彼の意思とはかかわりなく、彼を慕い頼る者たちは相変わらず彼の庇護を求めて彼の周りに集まってくるのだった。また、それが彼の生き様を差配する運命的なものの仕業なのかもしれない。まさに、ヴァレンシュタインが辿る生の道程は、歴史の魔の手にかからめとられる国家的な人物が陥る悲劇である。

注

次の略語を用いている。

NA: Schillers Werke. Begründet von Petersen, Julius. Nationalausgabe. Weimar 1943ff. 同全集からの引用と参照箇所については本文中に記す。なお、略語に続く二つのアラビア数字は、順に巻数と頁数を示す。

- 1) シラーの歴史観の特徴をなす現在賛美としては、例えば、『世界史とは何か』では次の既述が窺える。「ときに私たちの国々はどうだろうか —— 何と緊密に、なんと巧みにそれらはお互いに絡み合っていることだろう。……ヨーロッパの諸国家連合体はひとつの大きな家庭に変わったように見える。この家族の成員はお互いに敵意を抱くことはありえるだろうが、しかしもはや相食むことはないだろう」。Vgl. NA 17,367。あるいは、詩『芸術家』*Die Künstler* (1789年)でも、現在は「時の最も成熟した息子」(NA 1,201)という呼称を授けられて賛美される。「おお人間よ、なんと美しく、棕櫚の枝を持ち／おまえは世紀末に立つことか／気高くも誇らしげな雄々しさのなかに／開かれた心を持ち、満ち足りた精神を備え……」。Vgl. NA 1,201
- 2) シラーはフランス革命の惨状に心を痛め、ドイツの作家としてフランス王ルイ十六世弁護の試みをケルナーに打ち明けたこともある。参照。1792年12月21日付ケルナー宛シラー書簡。Vgl. NA 26,171f. また、シラーはF.Chr.アウグステンブルク公(Augustenburg, Friedrich Christian 1765 – 1814)にフランスの民衆の愚行を訴えたこともある。「聖なる人権に身を捧げ、政治的な自由を闘い取ろうとしたフランス国民の試みは、不可能なものと相応しくないことを明るみに出ただけでした、そしてこの不幸な国民だけでなく、彼らと共にヨーロッパの多くの部分をも、そして今世紀全体を野蛮と隷従のなかへ戻してしまったのです」(NA 26,261ff.)。参照。1793年7月13日付F.Chr.アウグステンブルク宛シラー書簡。
- 3) Wiese, Benno von: Friedrich Schiller. Stuttgart 1978. 4.Aufl. (1.Aufl. 1959). S.637
- 4) 『ヴァレンシュタイン』三部作の成立史については次の注釈書、研究書を参照している。NA 8,357ff. S.931ff. Koopmann, Helmut: Anmerkungen über Wallenstein. In: Friedrich Schiller Sämtliche Werke. Bd.1. München 1968.
- 5) Vgl. Koopmann, Helmut: a.a.O. S.931. NA 26,357.399
- 6) シラーは1788年1月18日付ケルナー宛書簡で次のように述べている。「演劇のためには私は書物を必要としませんが、心の全てと時間全てを必要とします。例えば、

歴史の仕事では書物が私のために半分寄与してくれます。……私の詩的な春の花が枯れるときに、私が何で生きてゆくべきなのかを考えなければならないことは、正しいことでしょうか、間違いでしょうか。……歴史は私のために最も実りあるものであり、最もありがたいものでないだろうか」。Vgl. NA 25,6

- 7) シラーの歴史関係の著述はこの時期に集中。その主なものだけでも、『オランダ離反史』(1788年)『世界史とは何か』(1789年)『モーゼの使命』(1789年)『モーゼの原典の手引きによる最初の人間社会について』(1790年)『リュクルグスとソロンの立法』(1790年)『三十年戦争史』(1790年)。その他に、イェナ大学での歴史学の講義が課せられていた。
- 8) 1796年3月18日付J.W.v.ゲーテ宛書簡で、シラーは創作の際の手順、心構えを尋ねる。「あなたが創作の場合に、どのように作品に向かわれてきたか、を知りたく存じます。私の場合、特定のはっきりした対象はないのですが、最初に感情があります。対象は後になってようやく出てきます。ある種の音楽的な気分が先行します、そして私の場合これにまず詩的な理念が続きます」。 (NA 28,202f)
- 9) Oellers, Norbert: Schiller. Stuttgart 2005. S.192
- 10) H. Reinhardtは『ヴァレンシュタインの陣営』の兵士たちの描写に、ゲーテの『エグモント』における民衆の描写からの影響をみている。Vgl. Reinhardt, Hartmut: Wallenstein. In: Schiller Handbuch. Hrsg. von Koopmann, Helmut. Stuttgart 1998. S.402
- 11) 参照。1798年9月21日付J.F.コッタ (Cotta, Johann Friedrich 1764 – 1832) 宛シラー書簡。Vgl. NA 29,278
- 12) 参照。Vgl. NA 8,364
- 13) 参照。Vgl. NA 30,9
- 14) Vgl. Goethes Briefe. Bd.2. Hamburg 1968 (1.Auf.1964). S.360
- 15) シラーは占星術のモチーフを導入することに対して懐疑的な意見を吐く。参照。1789年12月24日付イフラント宛シラー書簡。Vgl. NA 30,16
- 16) Reinhardt, H.: a.a.O. S.404
- 17) Fuhrmann, Helmut: Zur poetischen und philosophischen Anthropologie Schillers. Würzburg 2001. S.96
- 18) Wiese, B.v.: a.a.O. S.641
- 19) Wiese, B.v.: a.a.O. S.645
- 20) Wiese, B.v.: a.a.O. S.637
- 21) Wiese, B.v.: a.a.O. S.647

- 22) Wiese, B.v.: a.a.O. S.647
- 23) Alt, Petr-Andre: Schiller. München 2000. Bd.2. S.440
- 24) Staiger, Emil: Friedrich Schiller. Zürich 1967. S.305
- 25) Staiger, E.: a.a.O. S.306
- 26) Wiese, B.v.: a.a.O. S.642
- 27) Staiger, E.: a.a.O. S.356
- 28) Oellers, N.: a.a.O. S.224
- 29) Fuhrmann, H.: a.a.O. S.102
- 30) Staiger, E.: a.a.O. S.554f.
- 31) Wiese, B.v.: a.a.O. S.655
- 32) Wiese, B.v.: a.a.O. S.655
- 33) シラーは一篇の喜劇も残していない。しかし、シラーの戯曲には喜劇的な役を演じる人物が登場することもあるし、彼の演劇論等では、喜劇についての論述が、多くはないが、窺えることもある。シラーの思想は、青年期の啓蒙主義的なものから、カントの美学哲学思想との邂逅を経て、観念的・理想主義的なものへと発展を遂げるが、喜劇、あるいは喜劇的なものについてのシラーの思想についても同様なことがいえ、晩年には高尚な喜劇の創作を目指していたと思われる。しかも、高尚な喜劇の論と牧歌論は思想的に相即不離の関係にある、というのが筆者の持論。筆者はシラーと喜劇論、あるいは高尚な喜劇の論との関わりについて、さらに牧歌論について考察を加えたことがある。拙論「シラーと喜劇（一）」（東北薬科大学一般教育関係論集1、昭和63年。1-24頁）、「シラーと牧歌」（中村志朗教授退官記念論集『カレイドスコープ』所収。1995年。45-57頁）を参照されたい。参考文献。新関良三『シラーと喜劇（三）』、「心」1974年5月号所収。
- 34) Fuhrmann, H. : a.a.O. S.95
- 35) Alt, P.A. : a.a.O. S.437